昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅八年十月一日発行卅八年十月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年通巻四三七号

川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

十月号

No. 437

Pensoj flugas trans la land – limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社十月句会

初心者歓迎！

作句の秋一人でも多く出席いたしましょう。

日時　十・月・七・日（月）午後六時

会場　自安寺（〔211〕一四七八番）

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題「箸」（二句）麻生路郎選

（路郎選に限り七時半〆切り）

「巨木」（三句）川村好郎選

「毛筆」（三句）黒川紫香選

「夕映え」（三句）橘高薫風子選

席題三題（当日発表）

句評　清水白柳

呈賞　☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費　百円

幹事　紫香・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・与呂志・清人・水洞・すゝむ・薫風子・柳宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円

同封（〆切十月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪（671）六〇八一

11月本社句会

兼題

無責任

すねる

古都

長尻

大阪文化祭第15回川柳大会

恒例による大阪文化祭の川柳大会は左の通り第十五回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されますよう、おすすめください。又どなたも出句の有無にかかわらずご来場の程お待ちいたします。

主催　大阪府、大阪府教委　大阪市、大阪市教委　関西短詩文学連盟

後援　毎日新聞社

日時　昭和38年11月17日（日）十二時開場、一時開会

会場　毎日新聞大阪本社講堂（桜橋南）

開会の辞　司会　西尾栞

挨拶　松江梅里

講演　大阪市長　中馬馨

兼題　経済学博士　宮本又次氏

「女」　麻生路郎選

「鳩」　堀口塊人選

「人生」　河野春三選

「こども」　岩本多久志選

席題二題当日発表

大阪歴史古代篇（スライド）　解説　大阪博物館　上田広祀氏

閉会の辞　吉田圭井堂

川柳賞　席・兼題優秀句に大阪市長・教育委員長から文化祭川柳賞を贈呈。

兼題投句　各題毎にはがき型句箋及び官製ハガキ一枚に二句ずつ。裏面に住所・姓名・雅号を明記。大阪市北区中之島、大阪市教委内大阪文化祭川柳大会係宛（十一月五日着限り〆切）

入選句集　希望者に頒布。一〇〇円、（郵券可）

不朽洞句帖

麻生路郎

蜘蛛の糸でも
妻はわたしにすがりつく

凡人と自称小さな諦らめか
二三吉のレコードで
二本ばかり飲み

市長さんの眼にも触れない長屋に居
せめてパトロンにでもとおじいちゃんが志願

この恋もフオアボールに終りたり

川柳雑誌十月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎…(3)
諷刺の基盤(二)……河野春三…(12)
迷信の話……中島生々庵…(26)
川傍柳初篇研究(七)
丸十府・岡田甫
川端柳風・高須啞三味・前田喜代人
岡崎重義・清博美・藤井和雄…(14)
新聞・暴走違反者を動力に・立場……麻生路郎…(4)
粋翁ついに逝く……東野大八…(24)
辞世の歌・句を追想して……八木摩天郎…(20)
汽車の句……浜田久米雄…(34)
名句と難句……麻生路郎…(18)
高野山川柳考……本多柳志…(30)
不思議な縁に絡まる挿話……好郎・圭井堂
多久志・梅里…(28)
句集「私達に見る女性の姿」……直原七面山…(32)
★現代柳人録……(27)
★不朽洞の人々……与呂志の巻…(41)
烈女浅岡……冨士野鞍馬…(25)
竹原川柳大会に参加して……中村九呂平…(32)
大万川柳「男ぎらい」発表……(39)
明治・大正柳誌順礼……奥津啓一郎…(38)
★続川柳書架……(38)
★不朽洞杯を手にして……摩天郎…(33)
川柳塔……麻生路郎選…(6)
同舟近詠……諸生家…(11)
近作柳樽……麻生路郎選…(20)
金泥集……北川春巣選…(31)
各地柳壇……麻生葭乃選…(42)
★柳界展望……(40)
「立姿」……菊沢小松園選
一路集「太陽」……金井文春選…(36)
「退職金」……中村九呂平選…(37)
★柳樽室……(46)

題字…麻生路郎・表紙…野尻弘

窓口談義

新聞・暴走違反者を動力に・立場

麻生路郎

新聞へ一寸一言

新聞の雑誌化は新聞の退歩だ。忙しい私たちにとって、朝日級の大新聞で四ページが理想的。但し、一日二十四時間に朝刊、昼刊、夕刊、夜刊の四回発行。朝刊・夕刊は主として政治・経済・外交・社会といったもの、娯楽・家庭・スポーツなどは夜刊で扱い、読者の希望で、朝刊だけでも夜刊だけでも自由に配達してはどうだろう。今の新聞は何んでも屋であるがため読者にとってはムダなページが多い。読みもしないページの紙代を払わせない合理的なものを発行して欲しい。以上は極く大雑把な要求だから、詳しくは考うべしだ。タバコ屋でタバコを買うように買える新聞であることものぞましい。

交通マヒと暴走

交通マヒについてはみんなで考えなければならぬ問題だ。

交通違反・無免許・暴走・衝突・ひき逃げ・酔っぱらい運転と毎日マユをひそめさせる新聞記事・明日は我が身にふりかからぬと誰が保証出来よう。

これ等の被害をふせぐ案はいろいろあるであろうが、二つだけ提案して見よう。もっとも突飛な、やや空想的な案であるから実現には「断」が要る。

それはティーンエジャーの暴走問題だが、彼等を飯の上の蠅を追うような取締りをしたところでムダだ。彼等若者は自分だけはどんなにスピードを出しても転落死傷するなどとは考えてもいないのだ。それほどピチピチと張り切っているのは次から次へと出かけてゆく、山登りを見ても判る筈だ。

だから、そうした少年Aたちを、捕えたら一所にしゆうようして、彼等のために一種のノルマを課するのである。

それは、阪奈道路沿いでもいいが、彼等暴走族だけが、いくら暴走してもいい専用道路を一定の長線距離に施設してやるのだ。そして彼等にスピード新を争そわせるのだ。直線だけでは興味を失うから、競輪場のようなコースも創ってやる必要もあるだろう。

ここへ収容された少年Aは終日でも、暴走させるが、この暴走を一種の動力に使用する設備をするのである。

日支事変の時、北京附近が戦場の巷と化していたが、百姓たちは何処で戦争が行われようと、そんなことには関係なしに肩に大きな鳥籠をかたげ、田圃に出かけて、その鳥の鳴く声を楽しみながら、終日野良仕事をやっていた。そして彼等の傍には牛が、終日野井戸の水をぐるぐると回転して汲みあげるノルマをやっているのである。

私の提案はこの牛のノルマを、もっと近代化した設備で彼等暴走違反族にやらせようというのである。いくら走ってもいいんだぞ、君は走りたくて、走りたくウズウズしてるんだろう。ここでウンと走れ、思う存分走れといってやれば、彼等はポリさんも話せるといってニンマリ笑ってこのノルマを続けるだろう。

教戒や罰金はその次の問題だ。彼等若者の溢れる精力を先ず吸い取ってやるのが先決問題だと思うがどんなものであろうか。

立場

総理大臣池田勇人氏がデパートでトイレに這入ったとする。ところが、そのトイレの前に沢山な人たちがたかっている。

「何かあったんですか」

「総理大臣がトイレに這入ったんだそうです」

「それで、こんなにたかってるんですか」

「そうです。総理大臣が出て来られるのを待ってるんですよ」

「随分閑人もいるもんですネ」

「どうしてです」

「トイレへ這入ったのは総理大臣ではなくて、池田勇人氏が生理的な用をたすために這入られたんでしょう」

「そりゃア、そうでしょう」

「それとも、視察のために這入られたんですかネ」

「そこんところは判りませんよ」

「若し視察に這入られたとすれば、総理大臣であるかも知れませ

んが、単に生理的な必要から這入られたとすれば、それは総理大臣でなくて池田勇人氏個人ですよ」

「へエー、そんなもんですかネ。私は総理大臣でも池田勇人氏でも、どっちだってかまわないのですが」

「そりゃアおかしいネ。総理は一国の政治を担当する職名でしょう。生理的な用をたすのは池田勇人氏個人ですからネ。コレを漠然と考えているのが日本人の悪いクセです。仮りに総理大臣が紅灯の下で妓を愛していたとします。それは何処までも仮りにですよ。その場合、その代価が或る大会社によって支払われ、総理はそれを黙認して大会社の事業を有利にはからってやったとすれば、それは立派に総理としての瀆職が成立する訳ですが、いかに紅灯で妓をもてあそぼうとも、職権を濫用しない場合、それは池田勇人氏個人の行状記は云々されようとも、総理大臣とは何んの関係のない事だといえないだろうか。

ところが総理大臣というレッテルが貼られると、池田勇人氏個人との分離が容易でない。ウッカリすると、池田勇人氏自身も混同し易いのである。それは人間の弱点だといえるだろう。自分では公人の池田勇人と個人の池田勇人とを劃然と意識し、断行しているつもりでも、他人がそれをさせない場合がおうおうにしてある。しかもそれが自己の欲望を充たしてくれる場合はおのれを偽ってでも公人としての職権を利用するものである。

斯うした場合の原理は総理大臣と池田勇人氏の場合に限らない。池田勇人氏にはまことに失礼であるが、人造りを主唱されている総理大臣と池田勇人氏を例とすることが、もっとも判りが早いと思ったのでご登場を煩わしたのである。

ここで又、前のトイレに戻ることにしよう。

仮りに、総理が水戸黄門のように身分を秘してトイレに這入り、デパートの糞尿を持ち帰えり、これを検査の結果、意外に多数の毒素を含有した菌を発見し、これを政治問題にまで引上げたとすれば、これは個人の池田勇人氏でなく総理大臣の池田勇人氏と認識を改めなければなるまい。

要するに、肉体的には同一人であっても、立場の相違によって、結果は同一でないということを平易に述べたまでであるが、斯うした判りきったことでも、ウッカリすると看過してしもうものである。

川柳人は斯うした立場の相違から来るムジュンの批判には随分ときびしいものだ。没食子の句に

飲まされて味方を売って戻って来

というのがある。労組の一員としての彼が個人としての彼に押し潰ぶされたかたちで、人間の弱さを遺憾なく見せているではないか。

近く又選挙があるらしいが、自分の意志と反対に一票を投ずる人たちのいかに多いことかを思うと、人間の弱さにつくづくと嫌になるのである。公明選挙に多額の費用を使うより、折詰はもらってよろしい、温泉へ行ってもよろしい。その代り一票は自分の思う人に投票しなさいということにすれば却って選挙が今よりも清潔になるのではないか。金を出しても一票は余所の候補者へ行くのでは、自然買収もしなくなるだろう。単純な考え方だというかも知れないが、金を貰っても罪にならんとなれば、警察の取締りだけでもラクになるだろう。ニセの証紙で世間の目をゴマ化して、フェアーだフェアーだと居据わっている知事なんかゴメンだ。選挙機械に使用される外に用のない国民にはなりたくない。

私たちは斯うした意見を真っすぐな意見だと思っているが、立場が変れば、君達は阿呆正直だ。そんなことで選挙に勝てる筈がない。選挙規則を誰よりも知っている筈の検事もウンと選挙費をバラ撒いて、違反に問われているではないかという。だからみんなは違反を承知でやっているのである。そうやそうやせいだい違反しなはれというより挨拶の仕様がない。斯うした世の中で、こどもたちが立派な非行少年非行少女になるのへ、こごとのいえる親たちが幾人いるだろう。

小さな親切もいいが大きな罪悪を見逃がしておいて、何をいってるんだといいたい。小さな暴力さえ見て見ぬ振りしている人間にどんな親切が出来るのかと思うとおかしくなる。

私は昔、

正直が何んのたしにもならず死に

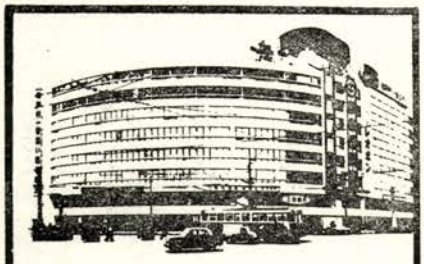
という句を詠んでいるが、これは岳父の一生を句にしたものだ。岳父は教師だったが、勤勉で正直で、人には寛大で、おのれには厳しかった。風采までが乃木元帥に似ていた。あんな立派な人格者が勲八等であった。そして正直が何んの足しにもならずに死んだのであった。

私はそれでいいと思っている。幸福なんて、金や勲章ではないからである。これも私の句だが、

幸福は金庫の中になかりけり

である。

よき立場に甘えるものは、やがてすべり落ちる。私自身は常に自分の立場に素直であればいいと思っている。妻に対しても、こども等に対しても。



最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと
ハンシンは
みなさまのデパートです

大阪梅田・水曜定休
阪神
電大阪361-1201(代)

川柳塔

麻生路郎選

大阪市　中島生々庵

会長さんだけ開襟でないあつさ
孫の留守ポツンとじじばば無口なり

豊中市　若本多久志

散髪をした時だけの若さなり
イデオロギーレールのように対立し
附箋まで貼って届いた請求書
うっかりと上役という声になり

大阪市　松江梅里

コップ酒ラッキョのきつい息をかけ

三ツ寺開店

橋一つ越せばなまめく灯がともり
ごひいきの袖にすがって島の内

大阪市　正本水客

ビール飲みほして化石になっている
ライバルと思われているあほらしさ

高槻市　丸尾潮花

ため塗りが汗に濡れてる舞扇

兵庫県　小西無鬼

孫はよしいつ死ぬのんと問われても

小鳥鳴き合せ会

家康を真似てはるらし鳴き合せ
有頂天他人の靴を履いて去に

議員任期満了近し

世の裏をちょっと勉強しただけか
献身的それは昔のことだった

犬を飼う

犬は君人より恩を知ってるぜ
暑中見舞に混って納税告知状

立候補辞退

情に弱い男だおだてんといてんか

大阪市　北川春巣

盆踊りの空地へアパートいつか建ち
よい方の茶を老人の日にはいれ

生活力子等には説いて貧に堪え

ハワイ　羽佐間柳葉

成績はビリで卒へても社長の子
物質慾僧も解脱に踏み迷う

堺市　吉田圭井堂

整然と分けたプールは閑古鳥
プールならいやよ監視が気にくわず
バカンスに預金あわれな程出され
売れぬ日はションボリ帰るバイトの娘

防府市　長野井蛙

湯上りの素肌はすだれに気を許し
縁のないビル金一升に胡坐かき
子に生きる素顔は男当にせず

岡山県　直原七面山

土曜日は別々どちらも恋を持ち
蟬でさえ鳴くのをやめている暑さ

鳥取市　河村日満

鹿児島宮崎方面にて

城山も地球が廻る夜の景
風邪ひいていても温泉には浸り
平泳ぎうまずたゆまず子に続き

倉敷市　木村千容

眼底写真にド肝を抜かれたり
病床にいてもいまだにケチるなり

倉敷市　田垣方大

歌手あわれゼスチャー過剰になってきた
家出してきたわとおとこためされる
呼捨てにせよと新郎言われても

大阪市　木村水洞

貫禄がついた気でいるムショ帰り
警察に協力をして呼び出され
大掃除西瓜をたべるだけの父

米子市　小西雄々

灯を消して話がつきぬ老夫婦
漫画でも悪は滅びるものと知り

同窓会より

成績の順に出世をしておらず

大阪市　山川阿茶

人づくりその膝もとの偽証紙
或る日或る角度から見たヒスイ
文字迄が心の通りだらけきり
唄の意味弟子にきいてる師匠なり

加賀市　那谷光郎

重態へ母の悲願は塩を断ち
案外は仲良し同士の妻が不和

大阪市　福井野迷路

遺留品届けて判コ二三ケ所
ずけずけと大人の嘘は許される
行きついて丁度時間と断られ

岡山市　浜田久米雄

ファイトだけあり足音がついて来ず
救急車走って夏の夜が更け
いつまでも悪のほろびぬ世を嘆き

出雲市　尼緑之助

もろこしの風よそぞろに湧く想い
人一人死んでも夜業続けられ

八代市　佐野卜占

読書の秋古本屋にも久しぶり
大根を料理するごと人を消し

京都府　大鶴喜由

学ぶとき遊んだむくい東西屋
はしたなさ綺麗に包む京娘
朝顔がしぼむと父を揺り起し

呉市　林野甦光

たった一人が養えずして多妻主義
語るには淋しい月も出ぬ夜にて
どぶ川に座してもかき船とか儲け
一人者うつり香家に持ちかえり

岡山県　福島鉄児

無い袖は振れぬ言い訳ながながと

岡山市　服部十九平

こまごまと日記をつけて寡婦固し
立読みが図々しくもメモをとり

岡山県　田村藤波

一瞬に美田を川原にした水魔
倖せは押しつぶされもせず帰宅
静かだと思えば補導主事が居り

児島市　本田恵二朗

特価品みたいにお色気切り売りし
口下手のどう口説いたか惚れさせる

鳥取市　森本法泉子

病院にトマトを植えて日を数え

京都市　松川杜的

不義を不義とも思わぬ女の美しく
ガスタンクの裏の長屋で「琴教えます」

堺市　高崎雄声

正義感と言うのが内輪もめさせる
裁判所時間厳守が判るかね

汗ふかぬ訓練もいる宮仕え
雨の中蕪せっせと子へ運ぶ
リバイバル町に雪駄の音がする

島根県　藤井明朗

末っ子が中学停退二度の務める
縁談は母に任かせて山登り
寺の鐘わびしく聞く日病んでいる

倉敷市　野田素身郎

オルゴール新婚時代の音で鳴り
台風はそれましたよとパチンコ屋
差を少しつけねば上の子承知せず

芦屋市　丸川初甫

来日の疲れをみせぬメッセージ
平凡な日記へクローバをはさみ

岡山県　池田古心

盆の孫西瓜へ蟻の如く寄り

東京都　石居高志

借家法楯にまだまだ居すわる気
家賃供託奴も法律知っていた
芋洗う海でかなずちばれず済み
簡単に期待に背く通信簿

大阪府　早川清生

泳ぐべき海を大資本の廃油
野合たたえる唄が街でもテレビでも

大阪市　西田柳宏子

会社慰安旅行小豆島へ
銅羅鳴らぬ内に麻雀もう開始
駄々っ子のように築城石坐り
BGにお株とられた飲みっぷり
ロープウエー見上げる猿と顔が合い

堺市　辻圭水

さぼるのもスケール違う学校出
法律が二様にとれるあほらしさ
かんじんなとこ抜けてるに判並び

加賀市　中松恒雄

仏様になっても大きい墓小さい墓
さざなみに似て観衆の扇揺れ
多忙さは命あるのも忘れさせ

大阪市　児島与呂志

大掃除今日は男として認め
冷ぞうめん吾が家の氷でもの足らず

岡山県　野々口美舟

赤紙で召され毛布で解除され
せん薬を探す夫で頼られず

もう一度返す言葉を用意する

西宮市　小浜牧人

ライターをすかさず出して点稼ぐ
病人へ聞かしてならぬ金を借り
反抗の姿勢崩さず蟹は逃げ

岡山県　池上知恵美

前途有望といわれて四十の坂を越え
姿なき風に抱かれて秋を知り

大阪市　橘高薫風子

思案まとまり雨垂れが落つ
ままごとでいわしさんまはわびしいぞ
旅に出て雀の声も新しや

明石にて

蛸壺へ人の子寝かす子守唄

下関市　中村九呂平

最良の顔で空けてるコップ酒
馬鹿になれ俺もそうだと前主任

鉄道生活を去りて

駅長にならなんだこと気にもせず
合理的阿呆がならぶ事務机
万引を追う執念もない暑さ

大阪市　西川晃

浮気するチャンスもなくて禿げにける
かいしょうもないのに世辞が嫌いなり
神戸市　仲どんたく

ぬるま湯はいやと熱血会社去る
三日見ぬ間におじいちゃん忘れられ
灯明へ一礼をしてボス曳かれ
気のきいた電車僕等をおいて行き
嘱託と云う名で余生飼われて居
平田市　久家代仕男

海水着男へ挑むように立ち
立のけの軒削れのとせち辛し
大阪市　本多柳志

高野山
禁制の女人を神として祀り
出雲市　原独仙

鮎釣りにゴルフに社長秋多忙
子の日記小さな親切見つけたり
失恋も矢張り神代の昔から
振り向けば踏んだ女は美人なり
車窓の景道路人夫も釣り人も
西宮市　野呂鵜汀

心中がわかり失言顔を染め
戻らぬと知っても貸さねばならぬ金
真面目さが笑いの席を遠ざかり
新潟県　高野むじな

育児書は腹のたたない人が書き
何のつもりか暑中見舞を医者が呉れ
大阪市　石倉旅風

ノーマネーいっそ涼しい夏の街
イミテーションブームは花に及びたり
八月の墓石に止ってみるトンボ
大阪市　魚住満潮

続西成界わい
くされ縁でしたと命日忘れない
青天の霹靂亭主が戻る便りが来
傘の骨ほど男があると酌婦酔い
愛媛県　村上旭童

夕立へ先ず雑草がよみがえり
保険屋に大事な午睡おこされる
里帰りの子の手も借りる村になり
しぶちんのくせにはしごをようやめず
神戸市　傍島静馬

へちゃやとも云えず明るい顔という
背を流す息子は四十に手が届き
アパート代親に持たして別居する
笠岡市　木山遠二

趣味語る横から金になるのかね
円満な相でド忘ればかりして
学歴を持たない知恵を軽蔑し
大阪市　平沢保美

庶務課でもこんな苦労があると云う
妻の価値株価と共に上下する
その若さうらやましいが意見する
我が胚の心細さよ大掃除
大阪市　河井庸佑

どうしても嫁くに父もおれて出る
続々とくる新薬に胃もあきれ
大阪府　谷沢好祐

ままごともやっぱりパパはやられてる
尋卒の不満組合運動へ走り
堺市　高津徹也

琴の音に故人も琴に生きた人
紫煙くゆらす恋をした後味に
叙景より叙情が好きで旅の宿
愛媛県　槇紫光

刑務所を昨日出たのが坐り込み

努力型運は摑まぬまま終り
陀羅助が効く胃を子供不思議がり
青森市　工藤甲吉

半分は片仮名という世を嘆き
停年で辞めて大きな犬を飼い
慰謝料の額によっては別れる気
松江市　小林孤呂二

思いのまま歩こうとする子に引かれ
やっぱり空気がうまいねと帰省の子
ジャズが狂ったようにシェーカーを振らし
豊中市　林夢虹

少女もう雌蕊の秘密知っている
蛾は火となるものを女哀しき
きれいな絵を描く乙女ケロイドをかくさず
大阪市　今西生薑

退職金妻の吐息は聞かぬ振り
肝臓の方は先生どうでっか
賭け運がないのに親父野球好き
京都市　室井八九寸

挽臼の二度の勤めが活きる庭
紹介のお顔よすぎた京泊り
客の廻転へ冷房の利かし方
岡山県　横山一声

夕立ちがやんでもお喋りまだやめず
小娘にバカンスしないとおちょくられ
人のんだ海と思えぬ美しさ
島育ちですと大分すれて居り
小松市　関戸宗太郎

貸しボート男ばかりで酷使され
君ケ代へ外人選手ガムを噛み
貴重品袋へ女中笑顔見せ
美祢市　安平次弘道

置手紙妻の浮気をまだ知らず
坑底へ遺体残したままつぶれ
千羽鶴不治の病と知らず折り
宇部市　平田実男

スカウトを意識しすぎたのが打たれ
駐在も裸で汗を拭く暑さ
白バイが事故それ見ろの顔が寄り
おじいちゃんおじいちゃんと恩給みなしゃぶり
コマーシャルのくどさに買ってやるものか
札束へ絶対折れぬ腰が折れ
行水の仕草をじーっと見たヘチマ
諫早市　川岡霊眼子

猪口才な捲くれば案外細い腕
嫉けているハンカチとくと捻られて
共産は許しませんと妻呉れず
貝塚市　杉本一鶴

信仰が汝を救うと窓の月
二号の真実しげしげ見舞に来
お先へ退院したのが死亡通知来る
富田林市　浅川八郎

忍従一途を円満とひとは言う
利用の限界と見たか誰も来ず
岸和田市　内藤きさ子

炎天に十六才の髪光る
友情と名ずけて耐えること多し
青森県　木村涼人

流行は我が家の都合待って居ず
ぴかぴかの靴で失保を受けに行き
倉吉市　奥谷弘朗

井戸端の話題隣の冷蔵庫
女房がたためば蚊帳も素直なり
兵庫県　遠山可住

何のおまもりか酎を酌む肌にそい
日帰りでよしやきもちを連れて出る

クモの巣を逃がれた虫よ早よ行きな

兵庫県　河原みのる

或る金持の死（二句）

葬式の奢りぐらいで持ってけず

蓄めて死ねば子は自家用で墓参り

モンタージュにそっくりなので眼鏡替え

姫路市　隠岐不酔

我が腕を言わずにストを煽動し

洋装をしててもノーとイエスだけ

鳥取県　清水一保

化粧にも勝る知性の美にひかれ

結論を急げビールが冷えて待つ

出雲市　中川晃男

家内中支える足をまた踏まれ

謎めいた女ほっそり終電車

大物に来るべきが来た逮捕状

松江市　柳楽鶴丸

生真面目な夫で未だ平社員

草刈にねぐら取られたキリギリス

京都市　都倉求女

その主義がポストと共に変りゆき

市電からでも明治は本願寺を拝み

汚職記事水泡よりも早く消え

兵庫県　大江秋月

パチンコが今日はつくつく日本晴

ボロボロのメモ公判に日の目見る

犯人の足跡という白い丸

詠　近　舟　同

帰省の眼変らぬ駅をなつかしみ

人間国宝みじめな生活洗われる

末っ子の身の上余生つまずかせ

民主化が徹して村長なり手なし

須坂市　高峰柳児

読み書きを昔ランプの灯で覚え

丸刈りは損だ落ちぶれてるみたい

小企業社長も免許証を持ち

南国の旅情帆傘が浮いている

仲人は百点近い娘にし

山深し第三第五発電所

お遍路の足親しめぬアスハルト

足摺の椿は風で梳いたよう

宿題は兄がしている草野球

今治市　長野文庫

毒食わば皿じりじりと落ちて行く

喧しい母に内緒の氷水

肩張って蘇峰の題字時期を待ち

今治市　月原宵明

憶八月十五日（二句）

兄の嫁もろて悲劇の幕を閉め

白旗をあげたこの手で弔旗出し

歳下が死んでゆくのでチト慌て

例えばを沢山ならべ説きふせる

名古屋市　長谷川鮮山

邪魔にしたこともあったと一周忌

酒強くなって組合専従者

いんぎんに座って言葉他人めき

大洲市　米沢暁明

諷刺の基盤（二）

河野春三

4

諷刺は前述したように皮肉や当てこすりの状態では十分にその機能を発揮したものとはいえない。いわゆる「諷刺のための諷刺」ということであっては、あまりに浅薄で、あまりに無精神であるといわなければならない。

狂句や狂歌が果たした諷刺は明らかにそうした表皮的な諷刺であって、何等作者の内部精神からの批評や、胸底からの怒りから発したものでもなく、第三者的なくすぐりに過ぎないところに浅さを露呈している。

作者が自ら傷つかないでどうして、肺腑をえぐる諷刺が生れ得ようかということである。

中野好夫氏は

「諷刺文学は恐るべき自虐的知性の産物である。考える能力の産物である。作家の人間存在を根底から揺り動かす激しい情熱に対して、なおこれをグイと捻じ伏せる底の強靱な知性の産物である。ここにわが諷刺文学の稀薄は、当然わが国民性的性格へとわれわれを導くものがあるのではなかろうか」といっているが、我が国の文学に於て痛烈な諷刺が生れなかったのは、彼のいうように「一に知性の薄弱、もう一つは奴隷精神」にあると断定しているのは同感である。古川柳時代からの諷刺から、現代の時事川柳や、うそくらぶ式の落首的精神につながる民衆の政治や社会批判の嘲笑や自慰や皮肉は、作者が痛烈なリアリズムを欠き、批判精神につながっていないところに根本的な、致命的な浅薄さがあるのではなかろうか。

川柳が古来諷刺性をその特長として来たことは他の文学に比してまことに誇ってよいことではあるけれども、その根底にあるもの、諷刺の基盤となるものを忘れていたとしたら、それは低度の諷刺でしかないとしか思えない。

まことに、知性の欠如と、奴隷的根性が、川柳の諷刺の方向を誤らせているとしたら、それ自身、それこそ諷刺の対象となっていなければ幸いである。

これは独り川柳だけの問題ではない。例を現代詩にとって見ても、

ハネ　近藤東

人は死しても名を残す
トラは死しても皮残す
共同募金がはじまれば
トリは死してもハネ残す

国旗　近藤東

セガレよきようはメデタイ日
なぜ白旗をあげるのじゃ
いゝえトウサン日の丸の
赤を追放したまでじゃ

近藤東といえば、「レエニンの月夜」や「逃亡」その他モダニズムの詩精神、新鮮な技法とウイットに富んだ詩人で「詩と詩論」の運動をひきついで来た一人であって、戦后現実的意識の下に転回したものであるが、それにしても、この「えびっく、とびっく」に載せられた諷刺詩の浅さは納得出来ない。

観行日本　竹中郁

フジヤマ　売ります
ミヤジマ　売ります
ニッコウ　売ります
ニッポン　どこでも売ります
ナルトアソ
みな売ります
どうぞどうぞお越し下さい
わたし揉み手をします
わたし造り笑いします
お金たくさんたくさんよろしい
ニッポン人みな自動車（カア）かいます
ニッポン人みなライター好き
ニッポン人みな植木屋上手
ニッポン人みな時花歌（はやりうた）うたいます
みなお辞儀します
みなみなおとなしいです　はい

この著名な詩人のこの諷刺も、いわゆるそのものズバリであって、皮相なひけらかしに過ぎないではないか。

短歌の方の例を一つ上げて見よう

群衆と群衆ブギウギ　ぼろ太鼓
地球の中の　あ・ほ・ん・だ・ら
め・え　池永英二

チビに解放・ノッポに敬礼・シカシアイツニワケイレイシナイ

これは歌集「証人」の中の短歌であり、川村四郎氏が批評しているように、単なる個人の悲壮観、不満に終始せずに集団的要素もっているという特質に未来をかけることは出来るか、この諷刺の浅薄さには到底批評精神というものが上すべりしてついて行けないではないか。

5

諷刺が単に諷刺におわってしまっては、それこそナンセンスであろう。

私達は短詩というジャンルに生

き、この短かい形式の中で、思想の詩的醸成をはからなければ、それは「詩」としての存在価値を失ってしまうのである。短詩は、川柳をも含めて、究極に於て抒情詩であると私は規定し確信しているが、ブルニヌティエールがいうように「諷刺は抒情の一形式」だというのはまことに意味深いものがあると思う。そのためには、諷刺が暗喩の方法論にまで高められて初めて諷刺詩としての完成が期せられるのではあるまいか。

要するに、諷刺が第三者的な傍観者態度でのウイットやアイロニイに止っていては、それは詩としての資格をもつことが不可能だということなのである。

時事川柳なるものが、その「場当り性」によって人々を一瞬微笑させ、喝采を博してもそれは所詮消える文字に過ぎないとすれば、凡そそこに盛られた諷刺が如何に浅薄で、戯画に等しいものであるかが分ると思う。

栗林一石路は「川柳作者は、このような社会諷刺を目的として意識していたわけではない。むしろ警抜新奇な着想で人をあっといわせようとするのがねらいであったから、社会人生にたいし、一定の距離と余裕をもった、いわば傍観者的態度をとっていた」（日本の民衆文芸）といっている通り、川柳が傍観者的での揶揄に終始していたことは指摘されるべきで、岸本吟一氏が「人生を高所から見物し、くすくす笑っているような態度は諷刺の本質でない」といったのはまことに適切な言葉であると思う。

村田治男氏（歌人）は

「ぼくは月並な意識上の諷刺を取上げることの愚はしたくない。意識下にある諷刺性を駆馳した作品こそ、真の文学作品であるとおもう。それとなくそしることや、あてこすりが、文学に於ける諷刺であってはいけないし、遠まわしに社会や人物の欠陥、又は罪悪などをあばいたところでそれが文学であるともいえない」

といっているのは至当である。

それでは傍観者的でない、第三者的でない、いわゆる「高所からの見物」でない真の諷刺とはどのようなものであろうか。

それはいうまでもなく批評精神からする諷刺であり、内在するものからの触発するものであって、それが村田氏のいう意識下にある諷刺性に通ずるものといえる。

松本芳味氏が「川柳はいかりである」といったことは、なまぬるい諷刺を排撃して、痛烈に心底の批評精神を昂揚するものと理解すれば、これまた意識下の諷刺性といってよいのではないかと思う。

藤田武氏の「諷刺からの批評」へにある言葉を借りると、

「諷刺がいわば搦め手からのあてこすりにとどまっていては問題の核心を衝くことは出来ない諷刺が真の意味で正面きっての批評としての鋭い機能を、民族のもつ大胆なエネルギーのもとに自立させることが出来るかどうかが重要な問題点であるのだ。そして、諷刺はその対象とする像を明確にはあくしなければ、するどいイメージを結ぶことは出来ない。いいかえれば現実社会の矛盾や不合理性にたいする作者の激しい抵抗の燃焼があって初めて諷刺は生れてくる。」

というその言葉を味わってほしい。諷刺がよって生れる基盤はこのようなところにあるということを改めて認識しなければ、いつまでたっても、そのものズバリの、低度の、諷刺川柳しか生れないといってよい。

6

諷刺はこのように批評精神の所産であり、そのためには現実へのきびしい凝視ということが要請せられる。

リアリズムのないところに痛烈な諷刺が生まれる素地はない。

川柳が今日性をもち、今日的意義を賦与せられる唯一の根拠は、現実へのきびしい批判精神に目覚め、作者自身も社会人の一構成分子としての自ら傷つく場にあっての否定的精神から発するものでなければ、民族全体としての、民衆の智恵にまで発展することは不可能である。

中野好夫は

「諷刺は弱い精神からは生れない。自らをさえ焚きかねない烈火の如き情熱の産物でなければならない。従ってそれは常に強権に向っての反抗として現われる。弱いものを苛めて快とする如きケチな精神ではない。高邁な精神さえあれば、奴隷の身からも生れるものである代りには、自由さの中に置かれてすら、奴隷的根性からは決して生れはしない」

といっているのは私のいわんとするところを代弁してくれている。古川柳の諷刺が、せいぜい役人の子はにぎにぎをよく覚え

役人の骨っぽいのは猪牙にのせ

人は武士なぜ町人になってくる

嫁の屁は五臓六腑をかけめぐり

程度のものであっては心細いことである。

然しながら、折角ここに芽生えた諷刺の短詩を継承している私達としては、ここで諷刺の本質を追究して、本当に今日の川柳として、真に意義ある批判精神による諷刺性を見出すならば、それは大きい収獲であり、ただごと川柳の氾濫する川柳界の上に、新しい道を切り拓く有力な手がかりとなるのではあるまいか。

もとより抒情詩であり短詩である川柳に於て諷刺の方法には一つの限界があるかも知れない。いや、そういう限界を感じるこそ、この短詩の上に批評精神をいかに生かし得るかということに、私達の責任と喜びが二重に期待されるのである。

現代川柳に表われた諷刺作品を掲げて批判して見たかったが紙面が尽きたので次の機会にゆずることにしよう。

諷刺は最初に説いたように笑いの一分野であり極めて巾広いものであるために、それは低度から高度まで幾多の段階があるところにいろいろな問題を孕んでいると私は思う。

真の諷刺川柳待望はひとり私の念願であるばかりでなく、川柳の大きい課題として採りあげられるべきものと私は信じてやまない。

（一九六三、九、一六）

岡崎重義氏

川傍柳初篇研究（七）

丸十府　高須啞三味
岡田甫　前田喜代人
○　岡崎重義
川端柳風　清博美
藤井和雄

（4オ）

53　**けつの毛を四五本残しやめる也**　牛滝

川端＝「尻の毛まで抜かれる」の俚諺か？　人に馬鹿にされていたが、ふと気付いて、何とかだまされないですんだ。という句か。或いは、人形作りが、人形の尻の竹の削毛を四五本残して、食事でもするために手を休めたの意か？

高須＝「尻の毛まで抜く」というのは、対者をトコトンまで剝ぎとることだから、そのトコトンまで剝かず、少し残したところで止めてやる、という句と思うが、情景は遊里かバクチ場か？エゲツナイ句である。

前田＝この句は「やめる」が問題である。私は遊女の年あけにとる。そうすると「けつの毛を四、五本残し」が生きてくる老巧な遊女等で、だまし方がうまいのを、尻の毛がないというが、この女は、四五本残しやめるのであろう。

岡崎＝高須説のとおり解釈したい。

清＝高須説に賛

藤井＝人形説・女郎説は少し無理のようだ。高須説に賛成。バクチ場で身ぐるみはがれず追い出された姿を想像するが、文字通り解して、男色関係か何かで、尻の毛をむしりとるような悪戯でもあるのだろうか。とにかく「やめる也」には、最後に不憐な、可哀そうだの意味が、十分に汲みとれるから、やはりバクチ場風景と見るべきであろう。

丸＝「尻の毛を抜く」は、高須説の如くである。本句を解するカギとして「けつの毛をさっぱりぬいて見ないふり」（笹四22ら）という句がある。これは、遊女がその手練手管で息子などをはめこみ、勘当というような事にまで追い込み、金の切れ目が縁の切れ目と、見ぬふりをしている場合と解すると、本句は、このとことんまで追い込まぬうちに、遊女の方でいいかげんに切り上げるというのであろう。川柳の取材としては、他に例のない珍しいものである。

岡田＝遊女対遊客説に賛。但し、問題の「やめる也」は、遊女の方でなく、客の方と思う。すなわち「からっけつ」にされる寸前で、そのむなしさを悟り、プッツリと遊びをやめるのである。酒色にふけった経験のある方は、この句に同感をもたれるであろう。――こんなことをしていたら自滅だナと思いながら、だらだらと引かれて行く。とにかく「尻の毛」が四本でも五本でも残っているうちに「やめられ」る男は、よい方である。

高須＝なるほど、そうであろう。両師に叩頭。「やめるなり」が「放蕩」と判れば、句意も非常に明瞭で、むしろ佳句にぞくする句と思う。

正月廿五日開

54　**愛敬（あいきょう）が高尾しぜんとわるく成**　桝水

川端＝「高尾」は吉原三浦屋抱えの遊女で七代・九代・十一代と諸説があるが、ここでは仙台高尾のこと。――伊達綱宗は、原田甲斐等の謀略で吉原通いをするうちに、三浦屋の遊女高尾に心を動かされたが、高尾は島田重三郎と二世の契を固くして、初めは座敷ばかり勤めていたが、後にはすげない態度をとるようになった。

高須＝礎解よりほか考えようなし。

前田＝同。

岡崎＝というのは「高尾近う参れが気にくわず」（タル九七）からであり、それでも「不景気な顔を高尾がしても来る」（タル三〇）ありさま。

清＝賛。

藤井＝これだけだとするとつまらぬ句だが、ただそれだけか？

丸＝そう、これだけの、つまらない句。

岡田＝同感。こんな句をどうして抜いたか。

55　**三分（ぶ）しょしめて鎌倉の戻り駕**　仝

山端＝「鎌倉」は松ケ岡。「しょしめて」は儲けて。松ケ岡まで江戸から十三里で、三分は非常に高いが、逃げる嫁にしてみれば、追手を避けなければならないし、少しも早く着きたいから、駕代もはずんだのであろう。或は女の立場につけこんで、駕屋が三分と高く値をつけたものか。とにかく松ケ岡まで行った駕が、三分も儲かったので、吉原にでも行く相談をし

ている帰途のことであろう。

高須＝「しょしめて」は「せしめて」の転訛だから、「儲ける」というよりは「うまくとって」という方で、ボロクとって、ホクホク戻るカゴヤだけでよいと思う。

前田＝高須氏の「しょしめて」に賛成。

岡崎＝高須説がよい。

清＝「しょしめて」は「しょ占めて」である。相手の弱味につけ込んで、という意味で、高須説をとる。

藤井＝高須説に尽く

丸＝高須説の如し。12ゥの五連の句にも「鎌倉へよこ付ケにして三分也」とある。

岡田＝松ヶ岡東慶寺は、駆け込んで、そこで尼僧生活を三年しなければ、離縁は成立しなかった。「三分」はその「三年」を利かしたもの。

56　**婆々アを入て壱両に息子買**　閑々

川端＝「婆」は遣手婆。壱両は四分。紙花が一分で、女郎の三分と合わせて一両になる。吉原通いのどら息子。

高須＝「ば、アを入れて一両に息子買い。」とよみ、高い買いものとヤユしただけであろう。もちろんドラ息子の買いもの。

前田＝高須氏に賛成。

岡崎・清・藤井＝賛。

丸＝高須説でよし。

岡田＝高須説に賛。但し、礎講の「紙花」は変。遣手婆にやる一分は、現金が主であったと思う。――しかし、よほど茶屋に顔のきく客か、または顔をきかせて、大尽風を吹いて見せる客は別だが。

57　**夕部（ゆうべ）も公（こう）の御噂とどら仲間**　一甫

川端＝「公」が不明だが「昨夜も公のお噂と本田いひ」の類句があり「本田」は当時通人に喜ばれたマグの形であったから、句解は、女遊びに行った仲間が、同行しなかった友達に「昨夜は、女がお前はどうして来なかったのかと噂話をしていたぞ」程度のことを話しているのであろう。

高須＝「夕部」は「昨夜」で、「公」は、自分を「乃公（ダイコウ）」などと言った流に「貴公（キコウ）」の「公」で、遊び仲間の気取りを詠っただけであろう。

前田＝高須説に賛成。

岡崎＝遊び仲間の気どりだろうが、「公の御噂」はなにかからの引用でないか？

清＝高須説に賛。

藤井＝遊びの席でよくやる「身分自慢」の句で「この男は、こう見えても××の若旦那だよ」などと宣伝しておいた。「昨夜も公のお噂と本田いひ」の「お噂」この句の「御噂」ともに敬語なのは、それを意味していると思う。だから「公」も敬称の「公」であろう。

丸＝「公の御噂」は高須説でよい。引用、援用とは考えられない。

岡田＝「公」は高須説通り。当時の人は、漢学も少しはかじっていたから「貴公」などとよく言ったもの。当時の通人間の一種の洒落言葉。

58　**突出しか見立（みたて）られると人がちり**　閑々

川端＝「突出し」は、女郎に売られて初めて客を取ること、又は遊女そのもの。「見立」とは自分で買う遊女を選定すること。それで、遊女に客が決まってしもうと、格子先に集まっていた人が散ってしまった。「突出しは七十五日客が来る」で、遊女そのものより、余り客を取ったことのない妓と思う。

高須＝「突出しが。」とよんで、礎解の前の方でよいと思うが、それでは多少平凡な気がする。

前田＝川端説に賛成。

岡崎＝ほんとの初見世なので、素見客が集まっていたのだろう。

清・藤井＝諸説に賛。

丸＝諸説につく。初物珍しく格子先に集まって、わいわい品定めをしていた素見たちが、その相手の突出しが見立てられて店を引いたので、拍子抜けの格好で、ちりぢりにちって行くというので、くせのない素直な句。

岡田＝「突き出し」とは、初見世の女郎のことで「吉原大全」に〃此里にて生育（そだた）ず、十四五歳己上にて来りしをつき出しという〃と説明しているように、遊女の初見世には二種類があり、禿（カムロ）といって、十歳前後から妓楼にいた女の子が、初めて見世に出るのを「新造出し」といい、もう一人前の娘になってから売られて来て、見世に出るのを「突き出し」と言った。「新造出し」の初見世は、もう妓楼生活になれているから、新鮮味はないが、「突き出し」は素人娘だけに、うつむいたきり顔も上げられないのもいた。素見客などにも、そういう「突き出し」の姿はいじらしいし、どんな妓か珍しいので、一度は立ち止まる。しぜん格子先には素見客が集まるわけだが、それが「見立てられ」て、奥へ引っ込めば、見物人も散るわけである。すなわち、これは吉原の写実句である。

59　**袖口をならしてちっと手をかしな**　梅枝

川端＝不明。懐ろ手のまま袖口をばたばた鳴らして「一寸手を貸してくれ」と、下僕か誰かを呼んでいる御隠居ではないであろうか？

高須＝「袖口を鳴らす」というのは、懐ろ手ではなく、手を出していて、「袖口を合わせるように打ち鳴らす」ことだから、自分自身もやる気十分なのだが、他の助力も必要と見て、そこに居合わす人に「手を貸せ」と声をかけた所であろう。この場合、人物をはっきり想定できないのは弱いが、この人物は何か横柄な、権柄づくな感じである。

前田＝「袖口」は、殿中又は車上で簾（すだれ）の下から女官が装束の袖を出すことであるが、「ちっと手をかしな」との組合わせがピンと来ない。局が女中に、上様がそちを所望だからで、手をかしなというところだろうか。

岡崎＝「手を貸しな」は、助力を頼むのではなくて、文字どおり相手に手を出して呉れと言っているのだ。売買交渉で仲買人などと、これから値段のやりとりに移るのである。それは、他の眼にふれないように、自分か相手の袖口から手を入れ、袖の

中で指を握り合って、高いとか安いとかかけひきする方法で「袖口をならして」は、そのための身づくろいである。

清＝岡崎説に賛。

藤井＝「袖口を鳴らして」は、ちょっと見栄をきった姿と見たい。親分気取りで、喧嘩の仲裁を買って出て、そっくりかえって「皆さん、お手を拝借」で、シャンシャンと手を打って、丸くおさめた得意の風景と思う。「手を貸しな」を「助力せよ」と考えるには、上の句が生きないし、商売のかけひきとしては「袖口を鳴らして」が利かない。

丸＝はっきりしないが、タル一11ウに「袖口を二ツならして嫁をよび」という句があるので、本句も同想の句と思われる。すなわち、姑が嫁の手を借りたくて呼びつける場合のしぐさと見る。底意地の悪い姑の姿態がホウフッする。なお、この句は筥一23ウに多笑の句として収録されている。

岡田＝類句があるせいか、小生も丸氏と同様に解している。

60　**浜屋敷はるかの沖に琴の音**　　八　中

川端＝海岸近くにある別荘で弾いている琴の音が、はるか沖合で弾いているように響いてくる、というのか。舟遊びで浜屋敷の琴が聞こえたというのか、よく解らない。或は何か故事がありそうな気もするが。

高須＝古句としてはキレイな句。故事ありと思う。

前田＝わからない。

岡崎・清＝どうも、よくわからない。

丸＝文字どおりに、浜屋敷で弾いている琴が、海に反響して、はるかの沖から聞こえてくるようだ、というのである。故事などはあるまい。琴の主を思わせるほどにもキレイな句である。

岡田＝大名などのお浜屋敷で、奥方かお姫様が、腰元などと船遊びに興じている光景と思う。

藤井＝浜屋敷などというので、何か故事来歴でもないか、と迷ったが、ないものはないように解することも、段々とわかって、我ながら自信めいたものが芽生えて、楽しくなった。両師並びに先輩諸兄に感謝する。

丸＝岡田説を聞いても、なお自説に未練あり、撤回しかねる。

岡田＝浜屋敷の句は、丸氏の説が、今まで一般に行なわれていた説なのだが、部屋で弾いている琴が、海へ反響して聞こえるものかどうか、実験でもして見ないことには、何とも言えない。静かな海岸で、一度ぜひ実験して見たい。もし反響したら、いさぎよくカブトを脱ぐが、山のコダマはあっても、海のコダマはどうか。「川柳雑誌」の読者諸氏の御意見も聞きたいものだ。

（4ウ）

61　**内に寝る人とハ素見（けん）みへぬ他**　　五　楽

高須＝「素見」とは「ひやかし」のこと。遊び場（吉原など）で格子先から遊女をからかったり、妓夫と面白くやりとりして回り歩く「素見客」をいう。「内に」は「自家に」で、「自分の家で寝る人とは見えぬ素見客だ」という意味で『自家で寝る奴とは見えぬ素見客』とでもすれば判りいい句である。その「ひやかし」の上手さも思いやられようというものである。

前田・岡崎・清＝賛。

藤井＝ひやかし上手説賛成。くるわ慣れたお客にちがいない。

川端＝「素見」は廓内を揃ってぞめき歩くので「ぞめき」とも言われた。ひやかされているのは「突出し」か。解は礎稿に賛。

丸＝毎晩のように吉原中をぞめき歩いているのだから、廓中の事はまことに詳しい。毎夜を吉原で送り、まるでわが家で寝ることのないように思われるというのであろう。

岡田＝小生の解釈は、ちょっと違う。「内に寝る人とは見えぬ」は、自家へ戻って寝るとは見えぬ、すなわち如何にも妓楼へ上って寝る人に見える……という意で、換言すれば、如何にも女郎買いに来た客のような顔をして、丹念に張見世の女郎を、ためつすかめつ選んでいるような顔をしている、と解しているが、どうだろう。

高須＝岡田先生解を読んで「オヤ」と思った。私の解と、岡田解とは違っていないのに、先生は「ちょっと違う」という。「自家へ帰って寝るとは見えぬ」すなわち「妓楼で寝る男と見える」で、よいのではないだろうか。

川端＝高須氏と同感。礎解でよい。

62　**切て放せバあやまたず堀へ付**　　牛　滝

高須＝「堀」すなわち「山谷堀」で吉原のこと。「切ってはなせばあやまたず」は〝扇の的〟か何かの文句取りで、家を出たら、まっすぐ吉原へ行く（もちろん矢のように早く）という句。

前田＝「堀」は「山谷堀」であるが、吉原そのものではない。吉原へ行くのに、その準備をした船宿のあったところ。堀へつくのは既に出た「猪牙船」であることを知らなければ「切って放てば」が生きて来ない。

岡崎＝はずみきった吉原通いの感深し。

清・藤井・川端＝諸説の賛。

丸＝賛。諸氏の勉強に敬服。

岡田＝賛。「切って放てばあやまたず」は、軍記物の句調で、猪牙舟の快速ぶりを形容したもの。

高須＝礎解は、あまり判りきったことは書かない方がよいと思って、「山谷堀」を吉原と書いたり、猪牙舟と書かなかったりしたが、これはミスとは思わぬ。吉原へ通じていない「山谷堀」など、ただの堀にすぎぬし、堀を通うのに、歩いて行くはずがないからだ。所が、この句、柳雨先生は「切って放せばあやまたず堀へつけ」と書いている。私は「付き」だと思って、そう読んでいたのだが。

63　**戦場へよもぎ菖蒲を売て来る**　閑々

高須＝「よもぎ菖蒲」は「疵薬」だからそれが戦場に必要のことは判るが、「売って来る」が判らぬ。「売りに来る」の意で「戦場でよもぎ菖蒲を売って来る」という句か？と思う。

前田＝「売って来る」は、売りに来るの意でよいと思うが、この句は「よもぎ菖蒲」が問題である。よもぎの茎でつくった矢を「よもぎ矢」といったし、菖蒲は、刀太刀、兜、づくり等と、それぞれ、武運に縁のあるものである。これを暗示している句と思うが、どうであろうか。

岡崎＝礎解の「よもぎ菖蒲は疵薬」説に賛。ただし句意つかめず。

清＝同前。

藤井＝何か別に解はないか。よもぎ菖蒲が、女だと面白いのだが。

川端＝同様。

丸＝五月節句に、よろい・かぶと・弓矢・太刀などを戦場のように飾り立てたところへ、五日は軒にさすよもぎ菖蒲を売って来る（当時は菖蒲売りという小行商人があった）というので、節句前の街頭風景。「戦場へ」というのが作者のミソであろうが、わざとらしくて、却って詩趣をそこなっている。

岡田＝丸氏説、適解。

高須＝丸先生解にて合点。「戦場」が「男節句をする家」と判れば「へ売って来る」で、文句なし。明解に感謝。

64　**よくころぶ声だと留守居誉る也**　一甫

高須＝「留守居」は「大名の御留守居役」で「ころぶ声」は「回転する声」とでもいうか、コロコロとノドで回る「美妙な声」だが、さて「誉めるなり」が判らぬ。御留守居役が柳橋あたりで遊んでいる図か？

前田＝浅黄裏と同様、野暮でもてなかった。だから「よくころぶ声だと」相手の芸者にお世辞をいっているのである。当時の芸者（踊子）は、ころび芸者といって、時に売春した。「よくころぶ」が句の焦点。

岡崎＝やはり「ころび芸者」にかからないと、面白くない。

清＝前田・岡崎説に賛。

藤井＝ころび芸者の色っぽい声を聞いて「よく転ぶ」とほめた所と考えるが、留守居が大名の留守居役だとすれば、御愛妾へのかげ口とみる。御愛妾の出身は、もともと水商売あがりだから、なるほどな、争われないものさ、とほめているのであろう。

川端＝前田説に賛。

丸＝御留居役の寄合に招かれるのは、踊り子にきまっていた（川柳では）が、その踊り子は全く名儀だけの踊り子で、なりは振袖姿で若づくりだが、三十歳近い者も多く、三味線はつけたりで、ころびの方が本職だった。これにかけて、えんえん玉の如き声だ、とほめているのである。

岡田＝踊り子のコロビ代は二分、すなわち一両の半分。しかも三味線まくらのチョンの間コロリなのだから、高値だ。もう一分はずめば、吉原の上妓と、一晩中三布団でゆっくり楽しめるのだし、一分の女郎だって、まんざらではなかった。それだけに、踊り子をコロバせる階級は、今のことばでいえば「社用族」で、大名家敷の留守居役という渉外部の連中などでないと、こういうものを常に買うわけにはゆかぬ。従って、踊り子にとって、留守居役は上得意だったわけであり、それにはまた主として各藩邸の留守居役が集まる料亭（留守居茶屋といった）がきまっていたものである。寛政の改革で、松平定信が、そういう留守居役の弊害を指弾したため、茶屋もさびれて困った話が、伝わっている。

高須＝「御留守居役」なるものが当時の「社用族」とは、面白い見方だが、適切である。また「ころぶ声」が「売春」にかかっているとは、実は内心考えていたのだが「誉める」に適解がなくて、言いきれなかった。

輪講誤植訂正（前号）

12頁上段七行目「と、近所の連中が」ハ「と、と近所の連中が」

13頁上段十一行目「小綱町」ハ「小網町」

同三段四行目「百三十里の家で」ハ「十倍の百三十里で」

14頁上段二行目「時を声き」ハ「時をきき」

同二段九行目「づがり」ハ「づかり」

同三段四行目「この本の企図を」ハ「この本の全図を」

同十二行目「しんどいわ」ハ「しどいわ」

同下段一行目「五東」ハ「五楽」

同四行目「振りかざしその」ハ「振りかざしての」

同十六行目「などから声きき」ハ「などから聞き」

15頁上段四行目「アイサ佐様」ハ「アイサ左様」

同二段十一行目「その一部はの」ハ「その一部分は小生の」

同三段二行目「江戸小説」ハ「江戸小咄」

同下段十七行目「かな」ハ抹消

行楽の秋
趣味の集りに、吟行に、御宴会に、御家族連れの御清遊に御越し下さい。
もみじの名所
竜田大橋下車

電話竜田一六二
料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い
竹青の店

柳川名句と難句

麻生路郎

〔五五五〕
その人の反面宝籤買うとこを見た
（実男）

ジギルとハイドほどではなくとも、人間には人に知られたくない反面があるものだ。

柔和で実直で何一つ非のうちどころのない人だと思っていたのに、フト見ると、その人が宝籤を買うていたのであった。

アノ人に、そんな射倖心があるとは思わなかった。なんだか生活をのぞき見したような気がして、プライバシー問題のやかましい時代だけに、心の底に穏やかならぬものを感じたのであった。

〔五五六〕
蛇の這う音してずるり帯は落ち
（みのる）

浮世絵から抜け出たような女性の帯が、ズルリとすべり落ちたさまを描き出したのに過ぎないが、「蛇の這う音して」とはいかにも女性的な物凄い表現である。詩情豊かな感覚派の句として推奨に価する。

〔五五七〕
君の名はと聞いてくれたがそれっきり
（緋砂子）

「君の名は何んていうの」と聞いて呉れた人を今も忘れずにいるが、芝居や映画のように、それからの発展がなく、今も淋しく思いつづけているというのである。世の中にはむしろ斯うした女性の方が多いのではなかろうか。穿ちらしくない穿ちの句だといえよう。

この句は菊田一夫の映画「君の名は」の引用句で興味が倍加される。引用も巧みだ。

〔五五八〕
近代化ここの木挽の音にまで
（弘朗）

機機化はどこまで進むのか。こんな山奥の木挽きの世界まで、ジジジー、ジジジーと、巨木が大根でもきざむように切断されてゆくのを眺めて、イヤその音を聞いて、驚嘆したのであった。

〔五五九〕
海綿で数える金は人の金
（王石）

銀行へ行くといつも思う。昔、柳友の五葉が銀行の窓口で、札を沢山積み重ねて、「君これだけで二十五万円あるんだぜ」とあの口の重い男がいったものだ。「その中の何分の一を君が貰うんだい」というと、彼は淋しそうに笑ったものだ。彼の貰う金は海綿で数える金でもなく、パチンと音たててハジク金でもなかった。五十年ほど前の話だ。この句は「海綿で数える金は」がヤマだ。

〔五六〇〕
少年A叱らぬ父と母を持ち
（一路）

環境が生んだ非行少年の将来を考慮して、マスコミでは、その姓名の発表を差し控え、少年Aとして発表するのがならわしとなっている。

今の世は父も職務が多忙だし、母も共稼ぎの場合が多く、とても我が子の育成に力がそそげない。野放しの子が、少年Aの道をたどるのも自然の勢だといえるかも知れない。それをキャッチしたのがこの句である。

〔五六一〕
西成界わい正業についていますとテキ屋なり
（満潮）

西成といっても広い。釜ヶ崎あたりではいつもゴロゴロしている人たちが多いような気がする。僅かな金をつかんでもパクチ、売春、当り屋等等と正業らしい正業をしている人たちは少くないのではないか。刑事から、「どうやこの頃は」と聞かれて「正業についています」というのが彼等の合言葉かも知れない。その正業なるものがテキ屋だというのである。ダークサイドの一トコマを詠んだもの。

テキ屋とは——的屋。露店商人、香具師の類。

〔五六二〕
夏の色見たくないのかサングラス
（文庫）

何ものをも灼きつくすような陽光を避けたとすれば、そこには夏の色はない筈だ。サングラス族はそうした夏の色は見たくないのかときめつけた句だ。この句の場合、上五の「夏の色」は単なる色彩だけを指しているものではなく、精気熾んで万物総べてのものが生き生きとしている夏そのものに重点をおいての言葉であろうと思う。

〔五六三〕
私等が拾えば落穂絵にならず
（藤波）

有名なミレーの晩鐘を取材にした句だ。自分等が落穂を拾ったところで絵にはならないとは面白いネライだ。

ミレーはフランス生れ、バルビゾン派の画家で農夫の出身である。主に農民生活を

主題とした風景画家だ。代表作には「種をまく人」「晩鐘」等がある。

〔五六四〕

急患の裾を合せる手が動き

（喜由）

急救車で運ばれた急患でも無意識に裾を合わせる手が動いているのを見て詠まれたもの。患者はおそらく女性であろう。作者が病院関係の人であるだけに、斯うした場合に冷静な観察が行われて一句を成したのだろう。

〔五六五〕

伊勢湾台風被災地を行く

豊穣の稲がもずくの様に揺れ

（大八）

台風のシーズンが来るたんびに必ず思い出す句だ。「稲がもずくの様に揺れ」は酒呑みでないとこの句の味は判らないだろうと思う。特に台風の被災地を行く時に、もずくの揺れるのを想起する非情な心理がうごくなんて酒呑みでない限り判って貰えないだろう。

〔五六六〕

僕とこを酒屋できいて来た気転

（旅風）

「判った、判った。酒屋で聞いたら直ぐ判った」と、久しく会わない友がやって来たのである。

「ウフフ」私は鼻先で笑った。間もなく二人はチビリチビリやり出したのである、というのである。至って軽い句だが捨て難い。

〔五六七〕

口までが遠く薬が打ち顫え

（白雲）

痩せ衰えた病人が眼に浮かぶ。もう薬を嚥む時間だ。痩せ細った手で薬を口まで運ぶのに手というよりも薬がブルブルふるえて口までの距離が遠いように思われると詠んだのである。永い闘病生活をしている患者の痛々しい姿をマザマザと描出しているではないか。「口までが遠く」の表現は病人の実感でなければ出て来ないと思う。

〔五六八〕

浮き袋波を怖れぬ子を恐れ

（孝正）

浮き袋に頼りきった、童心の強さがよく描かれている。同時にその親としての心理が巧みに描出されているのがいい。「波を怖れぬ子を恐れ」に親としての愛情の深さも判るし、親が小心になる心理もうなずけるではないか。

〔五六九〕

近日にめしをの不渡り頂戴す

（野迷路）

社長は軽く彼の肩を叩いて、

「しっかりやってるか。近いうちにめしを差し上げよう」と、おっしゃる。

悪い気はしないが、それはいつも不渡りだというのである。軽い穿ちの句だ。

〔五七〇〕

英語しかわからぬ犬を貰いうけ

（阿茶）

英国の議員連中がフランスへ視察旅行に出かけた際、フランスは偉い国だ。こどもまでがフランス語を流暢にしゃべるといって感心していたという笑話があるが、この句の犬も英語しか判らぬと思っている。ところにユーモア味があるといえるだろう。

〔五七一〕

五輪へ五輪へ草も木も靡く

（好祐）

東京へオリンピックを引っぱって来ると、何も彼もオリンピックへ結びつけて一ト儲けしようと考える。浅間しいことだというのだろう。銀行は銀行でオリンピック定期などをはじめる。旅館は旅館で国際観光の名を冠せて、今や遅しと待ちかまえる。商人は土産物にアタマを一トひねりも二タひねりもしている。エチセトラー曰わく何、曰わく何という訳だ。そこを「草も木も靡く」と誇張したのである。

オリンピック大会（五輪大会）は四年毎に行う国際体育競技会で、古代のオリンピック大会はギリシャのゼウス神祭礼に五日間オリンピア丘で挙行されたもの。

〔五七二〕

ハンドバックピースも出れば珠数も出る

（宵明）

このハンドバックは後家さんのお寺詣りというよりも、料亭やバアのマダムのハンドバックと見るべきであろう。「珠数も出る」が、それを、より以上に有効にしているからだ。端的でしかも巧みに詠出されている。

〔五七三〕

折詰が出るのでこのこついて行き

（清人）

眼の前に選挙があるときなど、立候補者の後援者の名で、いろんな催しの誘惑の手がのばされるものだ。そうした催しに、折詰はつきものだ。その折詰に釣られて、ついノコノコと出かけることを詠んだものであろう。斯うした心の貧しい人が世間にはウジャウジャいると思うとなさけない話だ。

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

世に疎く病院だけの金遣い　羽曳野市　古川　静波
青白い男鋭い知恵を持ち　同
扇風機止めて涼みに出る暑さ　同
扇風機月賦と知らぬ首を振り　同
ロマンスがありそう月のデッキに出　同
酒一本配達するに四輪車　竹原市　杉原　愛鳩
バカンスどころか子等は成長期　同
株屋やめましたと畜生すましてい　同
不快指数はあがり株の値は下り　同
妻のバカンスあくる日は寝てしまい　同
けむたてているで案山子でないと知れ　鳥取市　鈴木村諷子
損な方ばかり歩いて五十年　同
感情が鋭敏すぎる頭痛にて　同
必要がなくなり挨拶もしてくれず　同
ありのまま言えばお口がわるい　同
役員にされて日曜まで出掛け　新居浜市　安藤　桂仙
天国へまでも新車を購うてゆき　同
真剣な顔で園児は横断し　同
溜め息を親に聞えるように吐き　同
とがめだて出来ぬ夫婦の忘れぐせ　同
行くあてのないのが迷わず辻を折れ　京都市　小黒　王石
この土地の特色消したアーケード　同
職人の指の太さも社交下手　同
ふるさとは足がしびれる三部経　同
ほっといてほしい涙は甘いもの　同
覚悟してお詫びに行けばもてなされ　竹原市　山内　静水
留置場がよかったなどとまだぬかし　同
小便の色が気になる昨日今日　同
よろこびは生きてるうちに墓もすえ　同
運の悪い人が汚職に引っかかり　兵庫県　斎藤たけお
アルバイトどころか応援に呼び出され　同
お燈明電気にかえてお盆が来　同
仕事しの嫁が来たので寐ておれず　同
ヒット一本打てず定年来てしまい　新居浜市　小林　孝正
夫婦げんかの種がボーナスとは悲し　同

辞世の歌句を追想して

八木摩天郎

古今に名を残している文学者はいわずもがな。忠臣、義士、烈夫、英雄に至る迄、殆んど自分の胸中を詩歌に托して、死んで逝った人のあまり多い事は、古い書物が之を立証している。殊に婦人までが、死の刹那に辞世を遺しているのには、流石、大和撫子でもある。大詩人のゲーテも「今少し光を」と叫び、ツルゲーネフも「神様は私を許してくださるだろうか」と遺言らしいことを言ったそうであるが、日本人の死は、こんなにも辞世の詩歌のように、安らかに死んで逝けるものだろうか。この世と最後の別れをする、厳粛なるべきひとときに、その敬虔な、真純なる瞬間、しみじみと自分を顧み、詩歌に自分の思いを托す、日本人ならねばの美しさがある。

ここに於て、辞世の詩歌を、忠臣、義士、烈夫、婦女、と、分けて引例歌とし、引例句として、その人の存りし姿を思い浮べるのも面白い事ではあるが、私は特に歌人、俳人、川柳人とに分けて、多くの人に知られている人々の辞世

盛装で来たに隣が美人すぎ　同

正直に勤めてるねと馬鹿にされ　同

貰い風呂鳴く虫の音に迎えられ　仙台市　平野　光道

ゆかた地に手をふれてみるワンピース　同

眉をかきルージュ色濃く産制し　同

蚊遣りの火でたばこをのんで下宿の夜　同

型通り幹事一任酒が待つ　京都市　大久保和三郎

おをつけて飾る言葉が親しめず　同

縛くられたように和服を着る娘　同

片足をビルに噛まれて大文字　同

みち足りた生活にきけば愛に飢え　岡山県　永宗　宗義

草いきれすだれを越して来る暑さ　同

バックボーン形勢不利へあわてゝ　同

愛の巣へ母邪魔がられよろこばれ　同

夜の蝶にスタミナ抜きでいるも歳　伊丹市　小川静観堂

自分で磨いた靴穿いて出る空青し　同

元部下へじょらなと組めと端居哉　同

見下ろす気分貧しさを忘れさせ　西宮市　末沢　花美

満たりた愛と見ている天の川　同

プレイガール門灯に似て蛾を集め　同

立山の大きさ山上バスで知り　声屋市　里田一ン十

宿浴衣着ても人柄かくされず　同

香水をつけて弱味を見せぬなり　同

誘惑を待ってるように腰をふり　高知市　須藤　俊江

母親の見合の如く娘は喋べり　同

サングラス男は皆けだものよ　同

炎天下氷屋暑い声を出し　岡山県　秋野　萩路

時計ばかり見ている家庭教師なり　同

胃を癒す煙草をやめて菓子を食い　同

保証人にされて買えぬ身淋しがり　倉敷市　水谷　谷水

兄嫁を妻にしてからホラ吹かず　同

万引の密告者とは淋しいね　同

大山登山　三句

落書が励ましとなる道標　今治市　越智　一水

山の汗仕事の汗に羨まれ　同

雲海に立つや神話を思い出し　同

胎動の激しさあんたに似て小まめ　枚方市　宮川　珠笑

原稿にすれば三行ほどの謝辞　同

パパとママ居眠り車窓子らのもの　同

ご神父も街のマリアを振り返る　羽曳野市　和田　痴亭

の歌や、句を少し拾ってみたいと思う。

我死なば焼くな埋むな野にすてよ

餓えたる犬の腹を肥せば

六歌仙の一人、小野小町が、放浪の果、奥羽白河の関近くで、行き倒れとなった時の歌だと伝えられるが、真偽は怪しいと思う。格調からも、思想からも、一寸近代的過ぎる感がある。平安の京を風靡した一代の才女が、こんな歌で、末路を飾ったとすれば、あまりにも悲惨すぎると思う。

いかにせんいくべきかたもおもほえず親にさきだつ

みちを知らねば

平安朝の多感な歌人、和泉式部の女、小式部内侍の歌である。丹後に別れ住んでいる母を慕って、逆縁に迷いながら死んで逝った可憐な少女、内侍の歌で、そのいとけない姿が彷彿と浮んでくるような気がする。

江戸時代に簇出した女流俳人として、元禄四俳女の一人、田捨、

福壽司
心斉橋筋大丸前
電話(271)三三四四番

厳禁の字が多すぎる療養所　同
八月の目玉が乾く油照り　同
雑巾の糸目ジクザク行進し　金沢市　根上杏花
勇退と美名をつけて追出され　同
六十のファイト鉢巻しめるだけ　同
ツケきけば朝まで飲める顔ばかり　堺市　青山慶之助
血の汗をかいた金だと出し惜しみ　同
愛情のもつれは金で解決し　同
海に来て妻の水着も悪くなし　広島県　上代美文
若い気のスカート少し短くし　同
無口でも立派に筋を通して来　玉島市　井上旭峯
すねて寐る浮世やっぱり腹が減り　同
貧乏のひがみ誰もが寄りつかず　宮崎市　野口卯之助
お見それをしていましたといっ白髪　同
ビールならBG気軽について行き　大阪市　福富隆子
アルバイト自信が出来て口答え　同
若い娘の背高に中年振り返り　高知県　山川勝子
サンバスの好きな年だと笑われる　同
負け越した将棋へ眼鏡取りに立ち　兵庫県　常岡孝風
手形割る時の目まるで人でなし　同

土用丑ホルモン焼ですましとき　児島市　伊丹柳瓢子
一ぱいの氷に日傘忘れかけ　同
子がみんな元気で洗濯機も楽し　青森県　岩淵一星
この秋に議員がかわる町の音　同
気楽さはオープンシャツですむ社員　大阪市　藤冨淀月
帰省して羽衣一番習わされ　同
味のことふれない夫で気を使い　竹原市　大洲大八洲
隣室は新婚洗濯物も派手　同
腰弁の現場たのしい湯茶の味　八代市　永松道雄
ぜいたくな家具をそろえて火の車　同
子沢山パパも一緒に掃き出され　八尾市　宮西弥生
叱られたあとの掃除の派手なこと　同
老夫婦労わりつつも口げんか　大阪市　山田李鳥
言い勝って見たが妻ではつまらぬ　同
負けん気もいつしか消えて二児の母　松江市　内藤喜夫
集金に来ぬかと役所で叱られる　同
子が出来て屋台酒から遠去かり　加賀市　木村一路
女房が何だと女房を頼りにし　同
香具師むかしクラスをリードした男　石川県　大山雅城
逢曳のための引立て役にされ　同

丹波氷上郡の代官、富田秀繁の娘、幼時から聰敏の聞え高く、六歳にして已に、「雪の朝二の字二の字の下駄のあと」と吟じた事が都まで聞え、「柏原に惜しや捨て置く露の玉」と云はれたが、後、遂に京都に出て、北村季吟、宮川松堅について、歌俳を学び、夫に死別して、剃髪して「妙融」或いは「貞閑」ともいって六十五才で歿しただけに、

秋風の吹きくるからに糸柳
こゝろほそくもちる夕かな

と、死をも客観的に眺める程の心の余裕を持っていた。

また「負うた子に髪なぶらる、暑さかな」の絶吟で知られている伊勢松阪の園女は、俳聖芭蕉にその風格の洒落なのでも深く愛せられていたが、その園女も後年辞世歌として、

秋の月春の曙見し空は
夢か現か南無阿弥陀仏

と遺しているのである。

見し夢のさめても色のかきつばた

江戸の紅色女の辞世句である。

朝顔につるべとられてもらひ水

で有名な加賀の千代女の句は、

月も見て我は此世をかしくかな

の句を遺しているのである。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐるの絶吟をのこし、元祿七年十月十二日大阪の南御堂前花屋の客舎に、五十一年の苦難の一生を閉じて、全国蕉門の徒、二千数百人に悲涙滂泣されたと聞く、芭蕉も、

此の道や行く人なしに秋の暮

代筆がかしこで結んだ男文字　七尾市　松高　秀峰

現代子可愛気のない事を云う　同

自尊心とやらが無性に腹を立て　津市　嶋野ひ呂し

仲間外れにされて嬉々もどる下戸　同

色恋の種にもつきず週刊誌　ポルトアルト　斉藤　流路

足にマメ手にマメ生活らくならず　同

その話何度か聞いた上機嫌　羽咋市　三宅　ろ亭

直情で上にはもてぬようにでき　同

墓参り子等はレジャーを楽しみて　大阪市　北中　ふじ

きりぎりす死んだすいかも買わんこと　同

差し向い碁石はせがれ白を持ち　香川県　伊藤　歌子

あの事故でカナヅチばれた看視人　笠岡市　谷本鈍愚坊

一つずつ電化たのしい日日があり　竹原市　山内　房子

自動車学課試験場にて

カンニングしたお隣も共に落ち　香川県　三井　酔夢

バカンスに健気乙女のアルバイト　茨木市　高木繁太郎

デパートの地下は涼んで通り抜け　大阪市　西本　保夫

敬老会頑として出席せずに逝く　八戸市　川村　映輝

もてあます暑さへ蠅が来てとまり　松江市　岡崎　祥月

妖しさのこぼれ女のサングラス　松原市　守屋　万竿

ナイターにテレビされてラジオニュース　神戸市　吉田　隆史

あなどった子の宿題が眠らせず　羽曳野市　稲本　凡子

精霊に食たいをさす盆三日　京都府　西村句楽坊

病む娘には涙は見せぬ母の愛　岡山県　梶川　信子

生けるもの聖しリベート握らされ　神戸市　大野木真砂

看病に生まれたような祖母達者　愛媛県　村上　石峰

会議室ロマンスグレーの背の広さ　大阪市　武居寿美司

忘れ物ないかとママはお茶を入れ　笠岡市　佐内　隆文

映画館夏枯れなればストリップ　加賀市　亀田　六角

甲子園ここのテレビは故障中　鳥取市　近藤　昭夫

根本中堂にて

境内の蟻殺すかみのがす議論し　大阪市　山地　判志

ほどほどにしなはれと妻先手うち　大阪市　森川すみれ

だらしなく朝を居眠るアイシャドー　河内長野市　森本黒天子

たばこの火くれる刑事の顔でなし　玉島市　水粉　千翁

今からでもそれ人造り町づくり　川崎市　赤池　五朗

しきたりの枠がいらないものをくれ　岡山県　鳥取　周甫

サングラスかけて出る程顔が売れ　大阪市　宮尾あいき

勤め先よくよく聞けば守衛なり　丸亀市　平沢柚蘭坊

内職の手を休めずに蚊に食われ　松江市　岡崎　雪美

の臨終吟がある。

柳翁拐井川柳の

木枯や跡で芽をふけ川柳

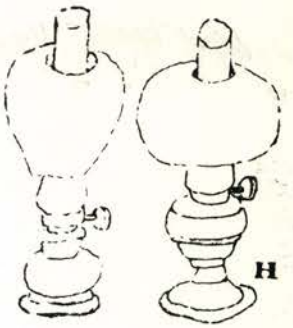
の句は、有名であるが、川叟即ち初代川柳の辞世に対し、花岡百樹は「初代川柳・凪の辞世は後人の偽作なりとし、阪井久良岐、森東魚はこれに反対していて説が分れている。凡じて、川柳人の辞世句は、剣岐にしても、卯木にしても、而笑子にしても辞世句は見当らない。

大正四年八月二日須磨海岸で不慮の死に逢った青明は昼顔は打揚げられた傍で咲きの遺句はあっても辞世句はなく、柳珍堂が大正八年九月十四日城山の寓居に物故したとき、

北の空より我に迫りては消え去り

と辞世句らしいものを書いて遺したが、明治四十二年五月十六日に死んだ天才六厘坊の辞世句が見当らないのも、淋しい極みではある。

コーヒの味
モダン川柳
心斉橋大丸北の辻東へ
御門
TEL(271)6684
御集会には階上御利用下さい



粋翁ついに逝く

東野大八

私の駄文のタネによく登場した武藤嘉門翁がとうとうなくなった。八月十一日のことで脳内出血が原因、享年九十二。

明治四十年から県議三回、代議士三回当選、終戦直後の二十二年四月から三十三年九月まで三期にわたり全国最長老知事として岐阜県政をもりたて、武藤岐阜県知事の名は知る人ぞ知るところ。生きたままで銅像になり、その岐阜県議会前の巨大な坐像は、岐阜公園の板垣退助の銅像より二倍も大きい。

人間齢をとるとイヤでも〝味〟がつくものだが、この武藤さんも政治家畑でその生涯の大半を過してきただけに、一風かわった持味をたたえていた。

三期つとめた知事を退くと、あっちこっちからいろんな公私とりどりの役職が舞い込み、数え切れぬほどの肩書をもっていたが、訪ねると大抵家にくすぶっていた。中年以降、この人は朝風呂が大好きで、晩年は一風呂あびると酒数勺を傾けて寝直しをやった。

「まるでオハラ庄助ですな」

といったら、女だけは抜けとる、とわらってこんなバカ話をしたことを覚えている。

「長生きの神様は貝原益軒ということになっとるが、こんな助ベェは世にマレなるもんじゃったな。何かの本で読んだが彼は淋病を患って閉口しとったんだな、島原の遊女を買いすぎたタタリだ。おかげで、女色逐うにも道具がダメじゃから自制せざるを得ない。かくて奴さんはだナ、雷の鳴る日は女にふれるな、雨の日はいかん、風の日はだめ、暑くてもいかん寒くてもいかん、結局天気晴朗にして風ウララカな日だけ交るべしというた。一年三百六十五日こんなめでたい日は数えるしかない、そのときだけに楽しめというたってだな、そんなに人間というものはブレーキのきくものではない。これというのもセガレが病気じゃから思うにまかせなんだ益軒先生は、こんなことでもいわんと自分のウサが晴らせなんだんだな」

武藤さんは若いころかなりの道楽をやってのけたが根が養子である。生まれたときの名は辻貞次といったが、二十一歳のとき武藤家に養子に出されると同時に嘉門と改名した。

「中学時代に面白い先生がいて、アメリカで彼女が遊びに来たときドアをノックすると、カモンと返事する。そのときの話しぶりが面白くて色けがあったのでカモンにした」

どうもそれはフザけた酒の上の話かもしれないが、若いころからおいろけにはとにかく弱かったらしい。だからこと女の話になるといくらでも面白いバカな話をつづける。いつかその話相手に回った大野伴睦センセイもついその気になって

「彼のカモンなる文字は女のアレだよ」とまぜかえしたら武藤さんも負けていず

「バンボクの俳号は万木じゃが、これは何人女をヘコましてもビクともしなかったセガレを誇称したもんじゃ」

といって大笑いになった。

古きよき時代に、娼家の妓たちから人の世のなんたるかをクゼツのかずかずに吹き込まれた多情多感な若者なりしこのご両人は、ことのほか義理人情に凝り固まり、万木宗匠のごときは関西のやくざの大親分のおヒロメに出席、万歳の音頭とりまでやっている。

「江戸っ子の有名な役者で、なんという奴だったかナ、モウロクして忘れてしもうたが、これが若いころには水もたれるような色若衆になっては舞台に出たもんじゃから、女の子がマスで量り、車につむほどできた。おかげさまで随分といい目をみたもんだがご臨終に際し、妻君を呼んで、お前のアレを一眼みたい、と懇望したそうだ。女もよくできた人とみえて、これが今生の見納めになると思うとつい断りかねて、枕頭に侍る親せき、友人の前ながらも病人のためにその願いをかなえてやったそうだ。それをじっと眺めてその男は、フン、と鼻先でせせら笑ってぐったりと眼をつむったそうだ。そのセセラ笑いの味が若い君らにはわかるまい？ワシにゃあ手にとるようにわかるがなあ」

嘉門さんはめったにこんな話をしない人だが、チョクに半分ほどの酒がのると、いつもこういう調子の軽口をいいたがった。

「正月になるとよく新聞社がきて、長寿のヒケツをききたがる。長寿なんてものは五体が満足に動いておればイヤでも元気で生きていけるんじゃが、わしはこの五体の活動をカッパツにするためには排セツをよくすることが第一じゃと信じとる。つまりわしが朝風呂を用いるのはケツの穴をいつも掃除するために入るのじゃ、ケツの穴さえ買いだてのキセルみたいに清潔にしとくと五ゾー六ブは常に健康じゃな、そうしておくと時には前の方が元気を出しおって、ホホら、いまでもな、とこちらを感心させよる。こういう朝は快適じゃな」

とにかくそういうトボけた粋談をやってのけた嘉門さんもとうとう天寿を完うした。ニコッと笑って、その慈顔はまさに仏性じゃったと人々はいうが、人間やりたいことをやり、言いたいことをいって、じっくりと余生を風呂場の湯気と一キクの酒で過ごした人なら大抵死顔は悪くはならない。この人自身も以前こういって微笑したことがあったのだから——。

「思い切り極道した奴の死顔は、みていてもこちらがうれしくなるほどコクのあるもんじゃ、おれもそうなりたいもんじゃ」

仰せの通りさぞ心地よいご尊顔でございましたでしょうね。

烈女浅岡（政岡）

冨士野鞍馬

寛文の伊達騒動は、後にいろいろに潤色されて、小説や浄るりに多く作られ、その「伊達競」に出てくる幼君亀千代の乳母浅岡は、「伽羅先代萩」では、鶴千代の乳母政岡となっている。いずれも架空の人物で、そのモデルは、伊達綱宗の側室で亀千代の生母、三沢初子であるといわれている。

そのころの女あさ岡高尾なり
（万天五）

と烈女として、綱宗に身請けされた高尾太夫と共にほめられてある。

騒動の中心は、幼君亀千代を殺して、分家の子を世継ぎにしようという陰謀で、

大そうどうのある前にちんがしに
（万天八）

その狆を浅岡厚く葬らせ
（タル三五）

浅岡は、悪臣渡辺金兵衛が亀千代へすすめる毒菓子を、自分が愛飼している狆に食べさせて毒味をさせた。その狆は死ぬのであった。それでまた、

浅岡と大公雀の子をそだて
（タル一〇〇）

と詠まれている。伊達家の紋は「竹に雀」であるので、亀千代を雀の子と洒落ている。

こうして亀千代を護る浅岡は、

鼠米にも浅岡はゆだんせず
（タル六三）

騒動で餌にこまったは雀の子
（〃七八）

悪臣の毒害に備えて、自分の炊いだ飯しか亀千代に食べさせなかった。

忠々と浅岡しとふ雀の子
（タル五八）

忠々が寄って育てる雀の子
（〃七五）

浅岡には、忠臣松前鉄之助と緊密な連絡があって、浅岡が差添鉄のふちかしら

（タル三九）

鬼に金棒浅岡に鉄之助
（〃一六〇）

とそれも詠まれている。

「伽羅先代萩」では、浅岡が政岡に、狆が千松になっている。

政岡も白雪糕は度々引かれ
（タル一二九）

白雪糕（はくせつこう）というのは、母乳の代用に、これを溶いて乳児に呑ませる、米、糯米、白砂糖で製した落雁のような菓子である。それを政岡も時々挽いただろうというのである。

七夜まで政岡をする里の母
（タル一六一、一六五）

この句は伊達騒動に関係はないが、娘のお産に里の母が来て飯炊きをするのを、政岡と洒落た作である。

子雀をねらふ鼠のおそろしさ
（タル二七）

むつの子をねらふ鼠のおそろしさ
（〃四三）

むつの子をすでに鼠が喰ふところ
（〃五四）

むつの子を鼠あぶなく引く所
（〃一二九）

伊達陸奥守を魚のムツに洒落、奸臣を鼠に見立てている。

時平の子孫らしいはは田なり
（タル一九）

箱入の鶴を原田は附ねらい
（タル一一九）

実録の原田甲斐は、「伽羅先代萩」では仁木弾正になっていて、忍術をつかい鼠に化けて鶴千代を狙うが、床下に警護する松前鉄之助（荒獅子男之助）の鉄扇をくらって逃げるところが芝居で演じられ、

金鉄の侍縁の下に居る
（タル一三）

鉄扇でぶちのめされる化鼠
（〃四六）

鉄之助鼠で忠の名をのこし
（〃四四）

と川柳にも詠まれている。その逃げた鼠が、正体の仁木弾正になって、花道のスッポンから、煙と共にセリ上る。

御殿場の鼠鶉の前で化し
（タル一四五）

とそれも川柳になっている。ウズラというのは、花道の横の観客席である。

ついに原田甲斐（仁木弾正）は裁きをうけて、亀千代（鶴千代）伊達家安泰、めでたしということになるが、乳母浅岡（政岡）は烈婦として讃えられ、

浅岡の手がら仙台揚り飯
（タル一一八）

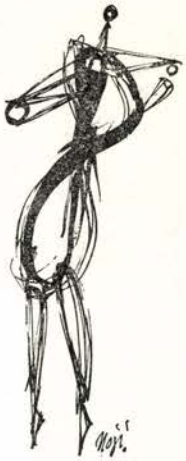
乳房よりひびくは乳母の忠義也
（〃六二）

末世までひびくは乳母が忠義也
（〃一四二）

と詠まれている。

仙台の孝勝寺に「烈婦政岡の墓」というのがあるが、それはモデルといわれている亀千代の生母、三沢初子の墓である。また初子の供養塔のある東京中目黒の正覚寺の由緒書には「伽羅先代萩の政岡にして我国の代表的烈女なり」とあり、政岡の銅像まで建てられてある。戯曲の架空人物が実在のように伝えられていることは、他にも例があり、おもしろいことでもある。

迷信の話



中島生々庵

文化とは何ぞやと問われて困るように迷信とは何ぞやという問に対しても簡単にこんなものだと答を出す事は稍々困難なことでないだろうか。あんまり問いつめられると迷信とは迷信じゃといいたくなる気さえする。岩波から出ている広辞苑を開いて見ると、「通常現代人の理性的判断から見て不合理と考えられる低級な民族諸信仰ト占など」とある。然し思うにこの現代人の理性的判断が果して将来永却に変りない理性とか科学とかであるというならばとにかく、それが確立されて居ないとすれば迷信の解明としてはまだはっきりしないという感じが残るのである。即ち年寄り連には根強く信じこまれていることでも現代人の理性的判断からすれば一顧にも値しない迷信でしかないのであるが、果してその迷信であるとキメつけていることが永久に迷信であるか、宇宙旅行が実現されている現状から見ても私達庶民凡人にとって不安でもあるのである。それはそれとして現在私達の周辺には、所謂理性的判断から見て不合理と考えられる低俗な民族諸信仰ト占による悲喜劇が日常の茶飯事として展開されているのも事実である。昔々今日の様に医学が進歩して居なかった時代には現在の迷信そのものが唯一の医学であったわけで、それが一部今日まで受けつがれて根を張って居るのも否定出来ない。例えば男女両性の双生児が生れたら一方を捨て子にして育てるとか、或は甚しく忌み嫌うて離婚騒ぎまで起すという様な事実さえあるのである。

東京都渋谷保健所長の宇留野氏は「母性及び小児の衛生に関する迷信」というテーマで調査結果二百九十九例を発表して居られる。その中最も多いのは小児の健康増進に関するもの六十一、姙婦の行為、行動と出生児の健康との関係のもの六十、ほかに多いのは産前、産後、小児の病気に関するものである。宇留野氏は指摘して、迷信がすべて有害とも限らないし、ある場合には科学的根拠はないまでも教育的、或は道徳的なものとして多少有意義なものもあるようで、たとえば「姙婦が火事を見るとあざのある子供が生れる」とか「どんぶりや土瓶の口から直接水をのむと口の大きな子や三つ口の子が生れる」「子供が火遊びをすると寝小便をする」とかである。要するに迷信のほとんどは根拠のないものであるから、勿論信じる方がおかしい。しかし「精神医学として信仰とか宗教的なものが効を奏する場合もある」と述べて居られる。何はともあれ、こうした原始宗教の遺物や、病的な心理状態は出来るだけ排除してしまわねばならないのが立てまえである筈だのに、まだまだ、最高知識人といわれる人でもなお、祟りだとか、吉日、凶日、墓相とかに頭を使うし、立派な既成宗教までも庶民の群集心理を利用して信仰の教義や系統を自らの手でゆがめているのさえある。最近も阪急電車が千里山線で何キロかの延長線を団地族のために開通した。その開通式が八月二十九日の木曜日。少し臭いぞと思って調べてみると案の定、大安吉日である。こうした類の事実は殆ど枚挙にいとまあらずという状態であろうが、これに就いて、ドイツ人のレンメルヒルトという人類学研究所長は「もちろん、今日の日本に純粋な信仰を求める人びとの数も決して少なくはない、しかし、はるかに多くの現代人は、明らかに既成の世界宗教を否定するか、少なくとも無関心である。彼らは文明人であるから、彼らが断定するところの非科学的宗教を否定して科学万能をひけらかす。それでは果して全面的に科学に帰依しているかというと、決してそうではないようである。現代人の知性は純粋宗教を排して迷信を受け入れ、彼らの頭脳の産物である技術文明は、どうやら現代人自身を不安と絶望に追いやる役目としているらしい、これらはとりもなおさず今日の文明人の心の「ひび」であり、また自然科学万能主義の、すなわち現代文明の「ひび」でもあると私は思う。」（38・1・20朝日）と論じている。それ程に現代人と称せられる人達にも比較的無抵抗に受け入れられているのは事実であって、豪壮なビルの屋上には稲荷大明神の赤い鳥居が見えたり、堂々たる外国製の自動車の運転台にお守り札が貼ってあったり、有名な日刊新聞や週刊誌に星占いのために相当のスペースを設けたり、大都会のメインストリートに運勢判断の占師がいかめしい顔で繁盛してる姿、到底挙げつくす事は不可能である。

私はさきに小児科医に関連あるものを取り上げてみたいと述べたが、この小児科といわれているのは生れてから満十五才迄と理解していたのであるが、最近の考え方からでは、生れてすぐの所謂新生児から始まるのではなくその前に胎生期、その又胎生期も受胎以前の細胞組織時代までも小児科医としての勉強を必要とするといわれて居る。その事は遺伝学とか、原子爆弾の様な問題、殊には最近やかましくなって来たサリドマイドの問題等から見ても御納得ゆけると思う。

昔の人もやはり早くから胎内時代からいろいろ気を遣って居た事も明らかで、難しく云えば胎教と

か、身体衛生の面でも俗信、迷信というものが数知れずあるようであって、前述の宇留野氏の統計にもそれが出ている。次で安産の祈りになると昔も今も変りなく真剣そのものである。一寸した事にも薬でもつかむ心理が動く。安井さんの稲荷といえば語呂が安いお産に通ずるからお詣りが多いなど、お詣りするほうは真剣である。牧村史陽氏著史陽選集にこんな面白いことが書いてある。「先年大阪の産科病院の院長の奥様が姙娠され、出産の間際になって容易に出産しないので、奥様は心配のあまり夫の院長に「私はこれで安産するでしょうか、死にはしませぬか」との問いに、院長は「近代医学上の出来るだけの手当は尽したが、これ以上は人間の力、自分の手では何とも致し方がないと答えました。奥様はますます不安で居る時、見舞のために集まっていた親戚の媼から、中山寺の観音さまにおすがりすると、代参が帰るまでに心身ともに安静となり、安産手水鉢の御祈祷によりめでたく安産が出来たので、さすがの院長も早速御礼参りをせられました。」と。この中山さんに就て私に面白い体験談がある。私の患家先で奥さんが姙娠した。家中大喜びで早速腹帯を頂きに御主人が摩耶さんに詣りねんごろに御祷りして帰って来た。丁度阪急の梅田駅で知人にあって、こうこういうわけで今摩耶さんから帯を頂いて来たというと、その知人それはめでたい摩耶さんも昔からあらたかな事で有名であるが、それは何としても中山さんが本家や。是非お頼みに詣りなさいとすすめられ、梅田から近いとこそのまま御主人は中山さんにお詣りして帯を頂いて帰って来た。家族の者も奥様も大安心。日がたつにつれて腹の中のこどももだんだん成育して来たが六七ヶ月頃になって二つのややこが入って居ることが判った。今更どうすることも出来ず大きなお腹をかかえながら九ヶ月十ヶ月。やがて女の子が二人無事に生れは生れたが、何しろ初産のことではあるし、その奥さんが御主人にうらみ事をたらたら。二つも帯を頂いて来るからこんなことになるのだというわけ。有りがた迷惑といえば罰が当る。この次は住吉さんから頂いて三つにするぞと御主人は笑い話で受け流すより外に手はなかった。

次に四柱推命の話であるが、生れた瞬間からその人の生涯の運命がはっきり予言出来るという話。戦前のこと。現在の国立病院近くに住んで居て今でもその家は戦災にも焼けずに残っている。初孫、しかも男の初孫が生れたお祝膳の席上、里の祖父がはっきりこの子は短命で、五才の何月何日何刻いのち危しと予言して大騒ぎとなり、それが又実際に現われて私はその子の死亡診断書を書いた実例がある。当時最新の医学を修めたという自負に満ちみちた医学士である私も一瞬ギクリとした事を今日なおはっきり記憶している。

昭和二十二年文部省に迷信調査協議会が設けられて「文化国家建設を標榜する日本にどんな迷信が、どの程度に、どのようなありかたでおこなわれているか」を調査することになった。その協議会の答申案の結論として、

一、迷信の定義は、学問上ではなしに、社会政策上定めるべきである。

一、社会政策上、迷信とは「現代の科学上の論理に反し、社会生活に黙認すべからざる害毒をおよぼすもの」というぐらいに、きわめて常識的に定義することが妥当であろう。

といっているが、この協議会も昭和三十年を終りとしていつのまにか解散されて終った。当時この協議会の委員の一人であった今野円輔氏の言葉を御紹介して私のこの話を結ぶことにする。

「科学の岸から、対岸の迷信の岸をながめると、迷信も正信も、ともに河流をへだてた存在である。正信と迷信とは、たがいに争ってもよい、その正邪をきめるものは人間の信仰心である。科学では、どうにもならない。道理の世界のことではない。ありがたさ、かたじけなさ、とおとさ、なつかしさ、慕わしさ、おもしろさの問題で、正しいか誤りかの問題ではない。……人間を善人と悪人とにキッパリ分類できないように、正信と邪信、迷信とに、あきらかに一線を引くことはむずかしい。」

（本社九月句会にて）

現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

（204）山下清（やましたきよし）

（一）山下清（二）清祿（せいろく）（三）—（四）大阪市東区淡路町三丁目十五番地（五）明治三十八年四月九日（六）大阪市（七）洋服商（八）二〇二局四二八七（九）**いささかの義理を果した二日酔**（一〇）碁、将棋、魚釣、写真（一一）有（一二）昭和十年十月頃

（205）菊田いさむ（きくだいさむ）

（一）菊田勇（いさむ）（二）いさむ（三）——（四）大阪府三島郡三島町味舌下二八二（五）昭和二年八月二十二日（六）大阪市旭区生江町（七）阪急電鉄社員（八）三八一局四六七〇（九）**最後までベストを尽したお人好し**（一〇）スポーツ（一一）有（一二）昭和二十八年四月

（206）太田茶人（おおたちゃじん）

（一）太田義男（おおたよしを）（二）茶人（ちゃじん）（三）——（四）京都市中京区姉小路通河原町東入（五）明治三十五年九月二十三日（六）大阪市北区曽根崎中二丁目（七）会社役員（八）京都（23）六六五八（九）**忘却の人世なれど日記かく**（一〇）歌舞妓・新劇・落語（一一）有（一二）昭和九年七月

（207）増井不二也（ますいふじや）

（一）増井勇一（いちい）（二）不二也（三）五客荘（四）神戸市長田区五位池町一丁目一〇（五）明治三十八年九月二十六日（六）神戸市兵庫区多聞通六丁目六（七）無職（八）神戸⑦四六三八（九）**盃の順日本の祝いごと**（一〇）旅行・将棋（一一）有（一二）昭和十一年一月三日

川柳雑誌社特製
投句用 柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）二〇円

不思議な（特集）
縁に絡まる挿話

マリエージのシーズンだ。いろいろな話題が生れるであろう。見合結婚・恋愛結婚・駆落結婚・写真結婚・と形式は種々雑多だが、結局縁がなければそれまでだ。仲人さんがいくらヤキモキしても結ばれぬものは結ばれぬ。ちょつぴり書いてもらつた。（編集局）

旋盤娘

川村好郎

結婚式には列席の人達が、お互に「不思議な御縁で」「これを御縁にお附合いを」と挨拶をかわすのが常であって、縁談から始って華燭の典へと展開してゆくように、縁がまず最初である。恋愛にしても袖の振り合うのも他生の縁からで、僕は恋愛結婚だ、理想の妻をやっと求め得たと言っても、やはり縁が先である。不思議なるかな縁である。

数年前全く未知の人が会社へ来て、

「うちの娘があなたの部下に勤めているAさんに、ふとめぐり逢ってから、どうしても結婚したいと申します。私も内情を調べましたがすべての点に申分ありません。しかし先方は私の娘があまり器量が良くないので断ってきました。しかし親としてまた娘も何とかこれをまとめたいと思いますので、是非仲を取り持って貰いたいのです。助けると思うて骨を折って下さい」

と頼まれた。

そこで私はAにも話合い、先方にも掛合ったが、家庭の事情等は釣合った両家であったが、何としても娘さんが余りにもコンマ以下で、色々交渉したが遂に破談になった。

縁がなかったのですと仲人労られ

好郎

ところが、娘さん一家はあきらめられず、持参金を附けるという条件を出したがなかなかウンと言わぬ。そこでAの家は町工場であるところに眼をつけ、旋盤一台を付けるということになった。Aはあんな娘を旋盤一台ではとても貰えぬ。そんなら二台。まだ少い。それでは三台とせり上げて、やっと話がまとまった。当時その娘さんの近所知人から、「旋盤娘」「旋盤娘」というあだ名をつけられて評判になった。かくて陽春三月めでたく結婚式にこぎつけ、私も何だか花婿の隣に旋盤が晴衣裳を着て坐っているような気がして、浮雲に乗っているような気持でお祝いの辞を述べた。

別居ということであったが、さて婚ぐと、貰ってやったのだからというので花嫁には忙しい毎日が続いた。が花嫁は一生懸命に働き、夫を愛した。

式すめば別居どころかこき使い

好郎

は其の時に詠んだ句である。

其年の十一月男子を産んだ。即ちいやじゃ、貰はぬ、旋盤だと言ってる中に二人にはよろしくやっていたのである。現在一男一女の親となり結構円満に暮している。

難しい条件や調査をして一生の大事とばかりに結婚をするように見えて、実はそれを超越した不思議な縁にて結ばれ、そしてその縁をお互が育て上げ、築きあげてゆくのが、どうやら私達夫婦らしい。

ご大喪と結婚

吉田圭井堂

大正十五年の春四月何かと指導してくれていた私の顧問格の医師が勧めるまま大丸で見合いをし、心斉橋の喫茶店でコーヒをのんで別れた。こちらは私一人で、仲人の医師と先方は両親につき添われて来たが話が纏ってその年の秋十月吉日を卜して式を挙げる事になった。私は数え年二十六才本人は数え年十九才、私はナンパ先方は萩の茶屋だから目と鼻の先にありながら、この婚約期間半年の間に今でいうデートなんか考えてもいなかった。ところが式も間近かに迫り何かと打合せのため仲人と同伴只一度先方の門をくぐった。

ところが仲人が私のことを酒も飲まず、煙草も喫わず、知事や市長から一再ならず模範青年として孝子として表彰されている前途有為の青年と強調していたらしいが、此の内酒を飲まぬことだけは真っ赤な嘘で、実はその医師が私の二十歳前後の時「君は血圧が低い、貧血症だから毎日一合位い酒を飲むと身体のためになる」とのことで歳にも似ず毎晩晩酌をやっていたのを仲人は忘れていたのか「酒も飲まぬ」と云ったらしい。そんな事は全然知らぬ私は先方ですすめられる儘随分飲んで平気で帰った。仲人も随分酔っていた。

あとで両親が本人に「先生は酒も飲まぬと云っていたがあの口振りでは相当飲むらしい、優に一升は飲むのではなかろうか」と話していたとのこと、事実その晩五六合は飲んだと私も思っている。嫁入って来てから一つ話になっています。当時から私は鉄工所を自営していたから、新婚旅行なんか正月迄延期して正月にゆっくりどこかへ行くつもりで本人もこれを楽しみに待っていたところ、大正天皇の崩御という一大困難に遭遇

酒
清
灘・魚崎
金露酒造合名会社醸

し、正月は勿論歌舞音曲の停止所謂諒闇の正月を迎え新婚旅行どころの騒ぎではなくなった。

かてて加えて私は大阪府市の青年代表として大正天皇ご大喪奉送の大任をおび、二月四日出発二月六日のご大喪に参列するの光栄に浴し流石に新妻を東京へ連れても行けず、単身上京大任を果して帰って来て、今日迄新婚旅行の期を逸したまま、早や金婚に向って驀進しています。家内にすれば婚約成立後たとえ一度でもデートをしたかったらしいが、こちらは前記のように人を使って自営している関係上事業本位だったので、女の気持なんか忖度する程の余裕なんてあろう筈がなく、今から考えると可哀そうな事をしたと思っています。

仲人の嘘がばれても縁は縁

圭井堂

祝宴のスピーチ

若本多久志

職席上、よく社員などの結婚式に招かれてスピーチを頼まれるが、川柳に初まって川柳で結ぶ私の祝辞はなかなかの好評である。

尤も何処へいっても同じことをいうのだから段々上手になる筈ではあるが……

先ず私は両家の方に「私の祝辞には忌詞がたくさん出ますがお気にかけられませんか」と訊ねる、差支えがあるという向きには、ありふれた無味、無感激な祝辞で責を果すが、ご承諾が得られれば好評の迷スピーチと相成る訳で——

開口一番、

再婚も同じ神社で式を挙げ

という川柳がございますが、如何に大安吉日を選んで立派な神社の式場で結ばれた男女でも、その二人に智恵と情熱と努力がなければ何時か別離という破局に陥ることは明らかなのであります。

昔、ナポレオンが自分の人生に三つの大きな喜びがあった、—その一つは終生の好き伴侶を得た結婚式であり、第二は初児を得た時、第三はフランスの帝王になった時であると言ったそうでありますが、そのナポレオンの第一の喜びに比すべき本席のお二人にいささか水を掛けるような話になりますが、私は只、お二人の結婚生活が俱白髪の末までも有終の美を挙げられんことを念願し、敢えて苦言を呈してご祝辞に代えたいと存ずる次第でございます。——

と前置きして静かな智恵と激しい情熱の話や、夫婦喧嘩の一幕から「出てゆけ！」「出てゆきます」という最後の言葉を終世の禁句にするという話にもってゆき、最後に、私の先生の句に

いつまでも肉と葱との仲であれ

というのがありますが、スキ焼鍋の肉と葱の様に甘さも程々、辛さも程々、肉の味が葱に泌み込み、葱の味が肉に泌み込んで何とも言えぬ夫婦の情愛を持ち続けてゆかれる様、そして先程お話したナポレオンの第二の喜びへ、更に第三の喜びへ到達されんことを念願してやまない次第であります。——

と結んで終る訳であるが、列席のお客様の中には最初の頃、とんでもない話だと顔をしかめておられる様子も見えてスピーカーとしてなかなか痛快な気持になるものである。

三八、九、八記

媒酌一人三役

松江梅里

七年前私は路郎先生のお孫曹子麻生一歩さんと滝井貴美子さんの結婚の仲人をさせて貰ったことがある。尤もその橋渡しは丸尾潮花氏ご夫妻でいろいろとり持ちのご若労をしていただいて私は所謂たのまれ仲人と言うことでお引受けすることになった。

ところで私はあまり月並みでない型破りの結婚式を考案した。

それは神官から三々九度披露宴と一人三役の挙式であった。先ず私の家の祭神金光様の神前に新郎新婦を着座させ衣冠束帯威儀を正した私はうやうやしく大幣行事を始める。続いて誓詞祝詞をおもむろに奏上。終って男蝶女蝶の三々九度新郎新婦玉串の奉奠。謡曲鶴亀の一節を以てめでたく謡い納め、引続いて両家親族知己のかための盃から個々の紹介、仲人としての挨拶、高砂の万歳楽の小謡いにて先ずはめでたしめでたしで恙なく式が終る。記念写真がすむと早速披露宴と、この間約三時間少しも時間の無駄もなく経済的でしかも厳粛であることが喜こばれた、以上のうちで、記念撮影だけは人手を借りたが、神官としての誓詞祝詞から謡曲、仲人としての挨拶、紹介、披露宴の料理万端、これは割烹「大万」の主としてすべてを取り行った。その後こんなケースで三組の新夫婦が次々誕生していった。それぞれ子宝を恵まれ今もなおますます円満に暮らして居られることを見聞して至極満悦している次第である。題して仲人のトリプルプレーとでもいうのであろう。

大阪市文化祭行事

秋にひらく

（第六回）

短詩文学作品展

会場　毎日ギャラリ（北区堂島毎日会館地階）

会期　9月30日（月）から10月5日（土）までの六日間
自午前十一時—至午後七時

作品　短歌・俳句・詩・川柳作家新揮毫作品
（半折・横物・色紙・短冊等）
出品其他のご用件は大阪市住吉区万代西五の二五
（電話大阪六七一局六〇八一）麻生路郎へ問合わされたい。

主催　関西短詩文学連盟
後援　大阪市教育委員会
川柳雑誌社

高野山川柳考（上）

本多柳志

（一）バスガイド

七月の盛夏読売新聞が宗教講座を、高野山で開催の事を知りまして、私共（妻と妻の母）も之に参加するの法縁を得たのであります。

高野登山もその昔、白河上皇が潔斎十日の後京都を発たれ五日目の夜半漸く、山内中院御到着の旅程と思い合せて、難波から電車では三時間、又昨年完成した有料道路を辿れば大阪―高田―五条ライン、若しくは大阪―和歌山―粉河ライン何れをとっても四時間程で宿坊到着という現在を考えますと全く隔世の感があります。

私共の観光バスは大和高田ラインを取る事になり、午後一時半大阪を出発二時すぎには車は、生駒山系を右に大和三山を遙か左手に真夏の大和路を南に向って快走をつづけていました。この頃からガイドさんの説明が始まったのでありますが、それは丁度、

テープレコーダーにスイッチを入れた様にしゃべり出した感じでありまして、車が大門をくぐる五時頃まで其の廻転は止りませんでした。

古墳を指しては神話時代の伝説を物語り、現在の市制への史実を教え、数字をあげて産業まで

バスガイド何でも知っている口調

で説明し、遙るか彼方にかくれた大和三山を指しては

バスガイド見えぬ山まで見せてくれ

たり、万葉古今の古歌を或は語り或は謡い

地理歴史文学古典バスガイド

振りを見せて呉れるのであります。未舗装道路で車が、はげしく揺れて来ると

県政をけなしてガイド立っとれず

なるといった実に千変万化涙ぐましいサービスであります。「右手の山をごらん下さい」と左手を「左前方の神社は」と右手を上げての説明は、到達した一つの芸を感じさせました。

左手は右右手は左バスガイド　三太郎

「春たけて紀の川白く流るめり吉野の奥に花や散るらん」の古歌に詠まれ、又有吉佐和子の小説で知られた紀の川を渡れば、真田幸村父子が大阪夏の陣までかくれ住んだ所、弘法大師の母を祀る慈尊院がある事でも名高い九度山の町であります。真田庵も今では

幸村もかくれておれぬ道がつき

まして毎日観光バスが頻繁に往来するので

真田庵観光バスの砂ぼこりを浴びている訳であります。

此処まで来ますと窓外何となく山気迫るものがあり、玉川の清流に山の緑が其の影を宿し、何となく高野山系にはいって来た感じであります。有料道路は未だ舗装されてないので、

バスガイドゆれたらゆれた声を出し

初めて来ました。

（二）女人堂

早い時代の仏教は女性の成仏を許してはいませんでした。経典の上では之を許していても其の頃の僧侶の規律においては女人を、魔物扱いしている程の残酷さであります。人間の差別など認めなかった空海も遺言の中で「婦女子を近づくる事勿れ」と戒しめておるのであります。女人禁制の山高野の悲劇はこゝに始まり、山に登り得ぬ女人の中には

仏書よりロマンに悲し高野山

のなげきを歴史に伝説の中に私共は数多く見る事になるのであります。

八十余才の老軀をさげて讃岐の国から辿りついた大師の母にも、山の戒律はきびしく山上の我が子をしのび乍ら山麓九度山で亡くなりました。月に九度降りて来た我が子と共に

孝行を高野豆腐にかみしめる

事になった事でありましょう。

鳥羽天皇の皇后美福門院さまも山の禁制は犯しがたく、死後其の遺骨を山上に埋めて

都から高野は遠い死出の山に登られ生前の悲願をやっと遂げられておるのであります。

高野山エレヂーの圧巻は何といっても苅萱道心の一編でありましょう。父が高野へ世を捨てた後の一子石童丸はすくすくと

母子家庭寒さに負けぬ子に育ち

母を伴ってはるばると

同行は二人たのしい旅の笠を冠って久々の対面に心をおどらして漸く

二人旅高野が見えた空の色の美しさに酔うていましたが、明日こそ父に夫に会えるうれしい二人の前に、女人禁制のおきてがきびしく立っていたのであります。石童丸丈を山に登らせた母は、病の為に麓の学文路宿で淋しく死んでおります。この物語りは色々と作り変えられて、江戸女性の恨みを

苅宣へ義理もないのに泣きに行き

綿々と今に伝えられているのであります。どうでも山へ登りたい女人の執念、女人成仏への救いとしてさしのべられたのが、即ちこの女人堂なのであります。女人堂へお参りすれば登山をしたと同じだとさとされていたのでありますが、それでも如何でも山内へはいり度い一心から、多くの悲喜劇が弘法の母や美福門院さまの外の庶民の女の中に起った事が想像されるのであります。

何としてでも入山し度い男装の女人の一人や二人は役人に見つかった事ではないでしょうか。まさか身体の一部を調べて見る事も出来ず、頭のよい役人から強制的に小用を命じられて

雪隠をたづねて女見破られ

た要領の悪いのや

女人堂自慢で立って用を足し

て悠々と入山して行く男もあったでしょう。

女人堂よくぞ男に生れける

倖せをしみじみと味わった事と思われます。斯うした涙ぐましい女人の執念も、空海入定して実に千年の後即ち明治五年三月、永きにわたって設けられていた、女人結界の制が解かれたのであります。

ぼんのうのまゝ女人堂を通り

女人堂今日もテレビのジャズが鳴り

アベックで土産をさがす女人堂

と変った訳でありまして、当時の女人が千年待望の結界が取り払われた喜びに目を輝かせて、夫婦兄妹嬉々として奥の院奥の院へと入山して行った姿が、ほゝえましく想像されるのであります。

（三）三鈷の松

壇上御影堂の前の所に一対の松が切石に囲まれて立っております。三鈷の松と名づけられる、一葉三本という珍らしい松であります。空海が唐から帰られる時に明州の浜辺から「帰朝の後伽藍建立の地を示させ給へ」と念じて一個の三鈷を日本へ向って投げられた。帰朝後空海はこの三鈷を探し求めて諸国を遍歴された。一と年大和の五条の辺で白黒二頭の犬を連れた猟師の口から「三鈷の落ちた場所をこの犬に案内させよう。」といわれ、犬に従って紀の川を渡って来ると、山の主であると自称する一人の女人に会い、此の女人の案内で山深く分け入り、樹上に輝く三鈷を見つけたのが即ち此の松だというのであります。之は恐らく後になって作られた伝説でありましょうが、併し何故に空海は布教の基地をこんな、山奥に求められたのでしょうか。当時の開祖達が自宗をPRする手段として二つの方法が用いられた様であります。一つは直接法ともいわれる方法でありまして、日蓮の如く自ら市井の街頭に立って、他宗を誹謗し乍ら堂々と獅子吼絶叫して大衆を折伏する方法。又法然、親鸞の如く布教の基地を都の中心に建立し、大衆を自己の膝下に集めて伝導する方法であります。之に対して空海は間接法とでも申しましょうか、各国から集まって来た若い秀才に対して、唐で学んだ宗教は勿論土木、鉱学、工学、農業等の学問技術を教え、卒業した之らの人達を各国に追わして、之らの人達の口と身体を通して広く大衆を教化する、といった方法であります。此の空海入山の第一目的である若い弟子の修業養成には、華美と誘惑に満ちた都では困難であり、都を遠く離れた深山に心耳をすます事が第一条件であるとして、当地の様な深山の頂上に着目された事と思われるのであります。交通不便な高野山上へ女人の入山を遮断して、若い修業僧の身辺から女色を遠ざけた、弘法の本意は精心的にも肉体的にも女人が、修道の邪魔になるからというよりも、斯うした禁慾の生活其のものが修養の一つの課程と考えられたからの様であります。

併し若人達には斯の様な不自然な生活が果して如何であったでしょうか。「外面女菩薩内心女夜叉近づくる勿れ」と教えられても彼らの若いいのちは之に従いて行けたでしょうか。

心頭滅却しても菩薩は拝みたく

なるのが自然の理でありまして、内心の夜叉を恐れるよりも、ぼさつの外面に心引かれて

生身の菩薩を拝む山を下りた輩も一人や二人はあった事でしょう。中には悪友の誘惑を却けて

学寮ももて余してる猫の恋にもんもんの情押えがたく

庭番もあきれて紙をはき集め

させた朝もあった事と思われるのであります。皮肉な事は斯の聖地への入山第一歩は、空海の一番嫌った女人であったのでありまして、

弘法も山は女人に案内されて三鈷の所在をつきとめて居られます。そんな大事な女人の入山を禁じた空海も、さすがに気がとがめたのか、七堂伽藍の傍に

禁制の女を神に祭り上げている如才のない所も見せておるのであります。所でこの三鈷の松について面白い言い伝えがありまして「三鈷の松葉をガマ口に入れて置くと金が貯まる」というのであります。私共を案内してくれた人も、つねに懐中しているそうでありますが、

ガマ口へ松葉を入れてノーマネー

で「今だに斯んなバイトをやっています」、という事でありました。

金泥集

麻生葭乃選

「玄関」

梯子酒玄関ひきづる様に上げ　阿茶
悪友が大トラ玄関迄とどけ　同
水まいて盛塩客を待つばかり　同
玄関で追払う気のお茶をくみ　同
玄関を借りて集金昼にする　同
玄関は猛犬注意の門の奥　寿美司
我が家の玄関すぐに勝手口　同
玄関でぽんとたたかれ靴をはく　同
玄関に足袋の白さがよく目立ち　同
大阪の大玄関の夜はネオン　同
玄関でもう他所ゆきの顔になり　一栄
玄関へまん幕張った嬉しい日　同
玄関はまねきと稲荷に任しとき　同
玄関へ温くみ残した話好き　清子
故障したベルとは知らず待つ玄関　同
郵便受のぞいて玄関開けてくれ　同
猛犬につきと玄関入らせず　美喜
玄関に立って呼吸を調える　同
玄関に野菊和服の顔を出し　同
新米の記者玄関へ日参し　酔夢
玄関にはみ出す数で寄附を乞い　同
玄関をうろ〳〵レターつく予感　同
見すぼらしい下駄玄関のすみへぬぎ　周甫
玄関をあきれ見とれる二号の子　同
玄関へ休診かけて二日酔　同
玄関は何かありそな靴や下駄　花梢
玄関の冷汗奥様まちがえる　同
玄関で帰ると云って昼を食べ　同
浴衣がけで来た玄関立派すぎ　勝子
玄関のブザーへピアノはたとやみ　同
押し売を犬玄関へ寄せつけず　同
玄関に見覚えのある祖母の下駄　あいき
つけ馬は玄関わきへ待たしとき　同
盛塩のある玄関へ通いつめ　きさ子
紋付がチラ〳〵玄関目出度い日　同
押売りと知らず玄関まで走り　カネ女
玄関で帰るつもりが上りこみ　同
村八分玄関開ける人もなく　同
玄関つきの家にも住めず年をくい　みさ子
玄関のアリラン靴共姦しい　同
叱られたあとの玄関派手に出る　弥生

次回題「絵具皿」〆切十月末日

句集"私達"にみる

女性の姿

直原七面山

句集〃私達〃には不朽洞会員百四十五名の作品四千四百三十二句が載っている。

そこで、これら作家達が世の中の女性をどのように眺め、どう詠み上げているかを調べてみた。

女性に関係のある句は六百八十七句あり、全体の約一割六分に当る。

その内訳は、一般女性（女として表現されているもの）に関するものが断然多く、第一位で百三十七句ある。

次は妻に関する百六十八句。佳句も多く、川柳作家の家庭生活が健全であるとともに、如何に平和であるかの証拠だと私は思う。

案外少なかったのが娘に関する句で、これは八十四句しかなかった。

思ったより多かったのが母に関する七十一句である。

このこともまた、作家の母に対する関心が如何に深いものであるかを如実に物語っていると思う。

さて、嫁の句はただの十六句で、嫁に対する川柳家の薄情さがうかがえるようだ。

次に残るのは、職業婦人に関する句である。

第一位は遊興に関係ある女性（芸妓、仲居、女給、女将、マダム、パンパン、ストリッパー、それに二号三号お妾さん等で表わされる女）で百十句を数える。

これでみると、川柳家は母を敬い妻を慕い、そし妓どもをもまた愛することの出来る博愛主義者でもあるらしい。

つづいてBGの十四句、次が産婆さんを含む看護婦さんの十三句、どんと少くなって女中さんの七句に女教師の六句、そしてミスポリスの五句。

ところが羨望の的になっている女優さんの句がただの六句であるのはなんと言ってももの淋しい。

どうも女優さんは川柳素材としては不向きらしい。

女工さんの三句にバスガールの二句。後はみんな一句ずつで、女店員に女アナウンサー。女医に女代議士に女社長、女アンマにマネキンとつづき、最後に尼さん巫女と種々雑多な職業婦人が詠まれているのだが、女性の独壇場であるモデル嬢に美容師さん。栄養士に交換嬢、洋裁師に家政婦さんと言った婦人が一度も否一人も顔をのぞけぬのはどう言ってみても片手落だ。

これは川柳家がその視界の広さをもって誇りとしているにもかかわらず案外世の中の一面だけしかのぞいていないと言うことを自らの手によって証明しているようだ。

もっともっと女性に関する研究と勉強が必要である。

さて、それぞれの種類の女性の代表句でも挙げて、その句評でも試みれば面白いとも思うのであるが、それはまたの機会にゆずるとして、皆さんもいま一度〃私達〃を開いて、この句集の中に活躍する女性の姿態をとことんまで追求してみて頂きたいと思う。

そしてそれらの作品の作者の面影をも。

―一九六三、七、四記―

竹原川柳大会に参加して

下関市 中村九呂平

六時四十七分下関駅発ディゼルカーやしろ号に乗った。座席もゆったりしていて誠に快適、いささか風邪気味だったので富山の置薬頓ぷくを用意していた。小郡附近で服用した。向い合せに豊満体の婦人がいてこれがとても暑がり屋さんで窓を全開風が私の頬にも強く当る、風邪気味の私少々迷惑。九月一日駅前に降り立って竹原の風を胸一杯に吸った。車中でのゴミゴミしたものが一変に消散したようで本当に竹原の風は美味かった。眼を転じると駅前の緑地帯に畳一・五枚位の立看板が見えた。水茎の跡も鮮に近県川柳大会と中央に大書してあり川雑竹原支部の文字も見られた。しばらくこの前に立って私も川柳人であることを大声で叫びたいような誇りとも欣びともとれるものを感じて一種の軽いけいれん（痙攣）を身内にお

ぼえた。ここから約十分余りで会場の森川邸に着いたが途中煙草店と駄菓子屋さんで尋ねたがどの店も親切に教えて下さった。人柄のよい町だと深くそう思った。とても嬉しかった。

会場前土壁の左右に新聞紙大の毎日新聞社旗が十五、六枚連なり大名屋敷風の大手門を入ると数人の世話人が分担よろしく、待つ間もなく次々に応待処理、実に水際立ったさばきに敬服、脱ぎ上りの所には選り抜きとも思える婦人、寧ろ容麗で直衛素美の方々に下足の処置までわずらわし、お名前でも聞いておいて後日礼状でも差し上げたい位の感謝の気持さえ湧いた。ここを通り過ぎるといよいよ大会気分が身内からあふれ出るような興奮が盛り上って来た。何時の場合も大会の雰囲気はとってもたまらなく良い、だから川柳は私の生命であり太陽であると誰にも誇って吹聴する。

四十分遅刻した私が最終の入場者ではなかっただろうか。各地方からのお歴々の面々、此方に三人、彼方に五人と屯して披講の時を待つ、雑談しきり、時々大きな笑い声さえ交じる聞きおぼえの声も耳に来る。首をのばして後姿見ても誰だか解らない、思い出せない、遅刻したせいで所定の小短に清記しているのは私位のものだった。気は急く汗は出る。まことにやるせない気持ちだった。七十畳の大広間もさして広いと思えぬほどで、出席者が百三十五名だと聞いてむべなるかなと思った。正一時に開会の挨拶があって祝電の披露、総理大臣池田勇人と高らかに読み上げられた竹原市の出身だからでもあるがよく気のつくことでもある。次いで清水白柳氏以下十通ほどの紹介が済んで、兼題「買物」から披講が始まった。私米子の小西雄々ですと名乗られてどきんとした。文通はあるが対面は初めて、紅顔ではなかったが美青年だったことに驚いた。私の画いていた雄々氏は明治生れの好々爺さんとばかり思い込んでいたから。何としても同席しながら挨拶する機会も歓談することも出来なかったことをたまらなく残念で残念でしようがない。この誌を借ってあらためて御挨拶にかえお詫びしておこう。次々の披講中に私のすぐ前の集団から勢火、白溪子、氷断と断続的に名乗りを上げられ、雄々氏のときとは異った気持ちでその都度ドキンドキンときた。早やる気持ちを押えて披講の全く終るのをもどかしく待った。そこで直ぐ私の前にいた氷断さんの背に合図をすると、先方も私の名乗りで承知されていたものと見えて互に膝を正し一別以来の無沙汰と再会の喜びに声はずませて語り会った。氷断氏の紹介で勢火、紅月、白溪子各氏とも初対面の挨拶でやや語呂もこわばったが、そこはそれ川柳人、すぐにもやわらいで寸時を楽しく歓談し合った。そこへ久米雄さんが昔懐かしい細身をヒョコヒョコ一団に加わり一層花をそえた。古い人に会うと決ったように市多楼さんが話題に上る。その誰もが熱血漢と云って下さる。本当にその通りで心が温まる。何かの用件でその場を行き過ぎようとする人の足を氷断氏が呼び止めて私を紹介して下さったのが中塚礎石氏だった。一寸と席を外されたが直ぐ戻って来られた。全国鉄川柳人連盟代表を務めて居られるので記憶はしていたが初対面だった。乗務で下関にも再々来て居られるが知らぬこととはこうも不便なものかと痛感させられた。広島勢も多数の参会で伯峰、十進、吐泉各氏とも親しい顔ぶれでみな懐かしかった。

大事なことを漏らすとこだったが川柳評論家として親しまれた高鷲亜鈍さんが私の右前に座して居られ、銀色に近い房々した長髪は一見有名人を思わせ、盗み見するようにネームリボンを見ると亜鈍と記されてあるのに驚き、清記の鉛筆を止めて挨拶をした。あれから二十余年、昭和十六、七年だったと思うが路郎先生のお供で市内長門町円通寺で句会を持ち記念写真が残っている。あれから門司に渡り博多、大牟田、別府から松山の五健さんを訪れ帰阪された当時の様子を想い浮かべて下関を懐かしげに話された。あの時は先生の鞄持ちでしてネーと悪びれもなく愉快に語られた。そのとき煙草を喫い付けようとされたが灯先がヘンテコなので驚き問いただすと眼があきまへんのやとのこと、香林さんと同じやつですわと淋し気に問わず語りだった。お慰めするのに一寸ためらっておると市多楼さんから香林さんに話題が移り、尾道に今年の二月に越したことまで話して下さった。四、五題披講が済んだ頃だったか、ふと右前を見ると亜鈍さんの姿はそこらあたりに見受けなかった。

ともあれ得点表の整理も出来たらしく満堂固唾をのむ。その静けさを破る美声高らかに「大阪の辻白溪子さん……七点」と優勝の栄光を告げた。大阪陣の面々一段と拍子に力がこもって響き渡る。さすがに本物の根強さを思わせる一瞬だった。次々と賞品の授与も済み、やや高調した面持の山内静水氏からお詫やらお礼、今後の指導援助等々微細に亘っての〆めくくりがありさしもの大会も滞りなく盛会裡に万歳となった。丁度四時十分。世話人全部が両側大手門まで立ち並んで厚くお礼をのべられた。例の婦女子の顔もそろっていた。内の一人あの婦人が静水氏の夫人ではないかと思った。

竹原発五時八分、一寸待つ間があるのでリポビタンDを一本飲んだこれに限る。本当に来て良かったとつくづく思った。こんなにも盛大な会が催されたのも静水氏の人柄は勿論、地元皆さんの理解と、情熱の現れであることと思い讃辞と敬意を捧げたい。本州四国九州各県からの投句があり、その数七十六名にも及び、国外からもニューヨーク、シャトル、ハワイ等々十一氏からの投句があった由、来年は更に盛大であらうことを想像しながら、また次会も参加させて頂くことを心にきめ竹原の皆さん本当に有難うと自答しながら汽車は静かに下に向って動き出した。（昭三八・九・二）

不朽洞杯を手にして

八木摩天郎

柳翁忌句会に、久々で先生から不朽洞杯を頂いた。名誉の事である。しかし、大きな杯や、楯は、誠に結構な事であるが両手で受けるので、小さいもので渡して先生からヤァと握手して貰ったら……

来年はオリンピックの東京大会だ。来年からでも、そんな事が出来ないものだろか。女のうらわかい人が授賞したら、恥しさで、ためらうのではないか。しかし、その感激は作句の向上にもなる。

俺も俺もと、先生のお差支えの際渡す代役が殺到しても困るし……摩天郎長生きせ……といわれそうな気もする。

汽車の句

★

浜田久米雄

来年の狀オリンピックが日本で開かれることになって日本はいまからオリンピックがすむまでてんやわんやの大騒動である。国鉄も来年秋までに東海道新幹線を完成させるべく夜に日をついで大車輪の奮闘で、予算が足りぬようになって、えらい人が辞職するような場面もあったが、とに角しかけた事業はやらねばならず五一五粁を三時間で走る夢の超特急は国民のいや世界の関心の的になっている。明治五年に新橋横浜間を汽車というものが走って九十一年になるが昔の鉄道といまの鉄道とくらべて見て大きな変化に驚くばかりである。

さてぼくが川柳を作り始めた三十年前からいまに至るまで川柳の雑誌、句集などを見ると鉄道に関係した句がどこかにいくらか載っていたのである。それ程に川柳人の見た鉄道、国民の生活に密接な関係にある鉄道は国民から川柳人から親しみを持って見られ利用されて来た。九十一年間の鉄道を詠んだ川柳を時代別に抜粋し分類したら「川柳鉄道百年史」というものができて非常に貴重な面白いものができると思う。余生に暇をつくってなにかまとまったものを残したい気持が起きてくるのである。

十月十四日は九十一回迎える鉄道記念日であるので汽車の句鉄道の句をすこし掲げて見たい。

引き止めて帰してくれぬ乗り遅れ　潮花

汽車が出るところへ走って来たが動いている車に飛び乗りをしてけがでもされたら大変である。後始末もさることながら本人の身のためを思っての処置であるが乗ろうとする人は帰してくれぬといきまくのである。

一人旅車掌にくどくどう聞き　東岸

旅馴れた人はとに角一人で知らぬ土地へ行くとなると心配でたまらない。汽車に乗れば車掌がたよりである。自分が無事に目的地へ着くのにはどうしたらよいか、得心のゆく迄聞いても目的地へ着くまでは心配である。くどう〳〵がよく利いている。

気罐車の堅さ判ったダンプカー　堰子

踏切事故は大なり小なり絶えないのが現狀である。砂利を満載したダンプなどに突き当られては運が悪いと汽車の方も脱線転ぶくする恐れが充分にある。ぜひ一旦停止をしてもらいたいものだ。

母危篤今日のこだまのおそいこと

川柳不朽洞会（十月現在）

指導
麻生路郎

賛助
長谷川一徹　中村祐吉　田中辰二　岩崎愛二　中村直勝　麻生磯次　井上吉次郎　島浦精二　恒藤恭　前田勇

洞友
田村孝之介　山本雨迷　山路閑古　柴谷宰二郎　麻生葭乃　橋本緑雨　高鶯亜鈍　沢田四郎作　東野大八　中島紫痴郎　戸倉普天　奥村丹路　戸田古方　西尾栞　市場没食子　土井文蝶　若本多久志　川村好郎　松江梅里　正本水客　黒川紫香　丸尾潮花　小西無鬼　西いわを　八木摩天郎　北川春巣

―維持会員―
寺井鋭々　古川魔花麗　前山北海　三輪峯園　大坂形水　井上湧三　西垣錦風　築山快夢起　市岡暁舟　藤本満年　羽佐間柳葉　福田妄夢　吉田圭井堂　国弘半休　長野井蛙　友淵貴山　太田良子　直原七面山　西森花村　河村日満　足立春雄　榎南夏六　石川侃流洞　安岡珊枝郎　牟田一哲　河村瑞川　木村千容　田垣方大　増田耕民　佐野卜占　小沢史葉　大鶴喜由　野本呑水　小林文月　亀山晴峯　山根白星　冨岡淡舟　飯降白香　西辻竹青　林野甦光　阿万的　岸南柳　黄瀬美秋　福島鉄児　青木遊星　服部十九平　大森娯句楽　長谷川三司　若林草右　大西迷窓　浜畑胡蝶　阿形一杉　益永貞女　山田季賛　山田烏荘　椙原一善　清水白柳　小川恒明　新川博也　尼緑之助　水谷竹荘

―特別会員―
中島生々庵　上田翠光　木村孤浪

不朽洞会員

―正会員―
大西八歩　石曽根民郎　石井白面人　布施筑川　桜川不水　浜田久米雄　菊沢小松園

みなつき

明治大正の汽車にくらべて「こだま」の方がうんと早くなっているのは乗っている人もよく知っているのであるが、母の死に目に会いたいと念ずる人の気持は、「こだま」が、おそいように考えられるのも人情である。

出発へ二号は次の駅で待ち　狂二

誰かに顔を見られては具合が悪いので前もって示し合わせた行動である。それにしてもこうまでして家庭を乱す原因を作らねばならないのは双方に責任があるようだ。

ラッシュアワーニンニクくさい奴の横　鵜汀

何十万という人が一時間はどの間にそれぞれの勤め先へ行くからラッシュアワーという。顔と顔、背と背を突き合わしているからいろんな匂いが鼻に来る。にんにくで元気をつけようとする人の横へでも乗ったら全く災難である。もっとも本人はわからないのだが。

浮かばれぬ遺骨車内へ忘れられ　泉洋

汽車の中へ遺骨を忘れてはいけませんという鉄道規則がないから忘れるのであろうが、言葉の言えぬ一片の骨は汽車から降ろされ駅の手を経て警察の倉庫へ運ばれる。これでは浮かばれない。

煙吐く汽車見にこいと田舎から　山椒坊

この句は別に田舎から来たよりではなく田舎へ行かなければ蒸気機関車が見られなくなった鉄道の移り変りを諷刺しているのであろう。汽車の煤煙から日本はだんだん遠ざかって行くのである。

東京へ行ける車掌はうらやまれ　香林

よその花は赤いと言われるが、制服制帽で乗っている車掌を見る一般人の考えはそうであっても、実際はそうではない。ただ乗っておればよいのではなく、たとえば暖冷房、水、ごみ、叱言、無理な注文、盗難、乗り越し、電報、尋ね人、不正乗車等々で乗務がすめばくたくたになるのが車掌である。

機関車の入替え駅の日の永し　法泉子

この句は機関車の入換えも悠長にやっている作業ぶりを詠んだのであるが、この入換えにはそれぞれの役目について、みな基本動作という規則がある。この基本動作によってやっているから脱線事故が防止できるので、その役目の人が思い思いの動作で作業すれば脱線をして、これを復旧するには悠長な作業時間の何十倍かを、要することになる。

近親感汽車三等の膝がしら　生薑

いまは三等でなく二等であるが、金持ちの乗っている一等階級とその次に来る二等階級とは親しみ易い話しかけ易いふんいきが違う。

田村藤波　臼井三林坊　下山清潮　本田恵二朗　松川杜的　馬場夢生　村上ゆづる　森本法泉子　小池しげお　竹内圭三　浜野奇童　橋本幸男　高崎雄声　高橋操子　藤井明朗　永松東岸　野田素身郎　永藤弥平　神谷凡九郎　清水望峰　木村十悟　伊達堰子　坂田東洋男　志水礼司　酒井ひか平　深見雅堂　松下京一楼　津秋六花　丸川初甫　笹野旭泉子　新岡回天子　池田古心　石居高志　小倉へとち　早川清生　西出一栄　酒田清子　平井井平　阿部柳太

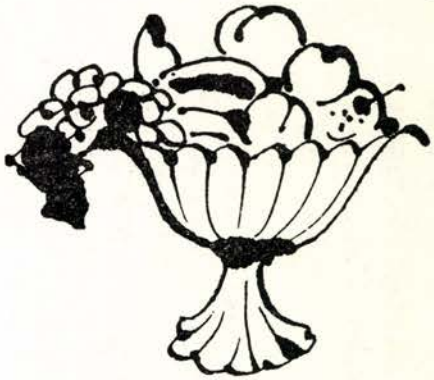
西田柳宏子　辻圭水　松岡委滄浪　中松恒雄　児島与呂志　野々口美舟　小浜牧人　菱田満秋　前川左文字　池上知恵美　米虫一乃字　平田三十郎　傍島静馬　西尾青一路　橘高薫風子　中村九呂平　多田ほなみ　山田伊三男　宮口笛生　桝本蕗児　石坂新雪　城内吾柳　西川晃　田中蛙眠子　野田一念　山本立児　林葵丘　仲どんたく　久家代仕男　本多柳志　原独仙　大谷月都　江国幽谷　光好陽子　河相すゝむ　野呂鵜汀　櫃口舟遊　高野むじな　辻白渓子　吉原紅月　竹内千里

石倉旅風　魚住満潮　田中狂二　林昌男　村上旭童　福田多可志　森田若人　高橋尚史　辻川喜仙　北村三歩　浅野芳朗　川岡霊眼子　石井かんな　杉本一鶴　本多清人　中谷ハナ子　村山光輪　浅川八郎　内藤きさ子　木村涼人　城一舟　牛島水京　加藤繁雄　森下愛論　平沢保美　植村客遊子　河井庸佑　小島孝夫　藤村〆女　田中烏雀　松本吉太郎　田ふじ　遠山可住　河原みのる　隠岐不酔　田中敏行　伊集院色　清水一保　中川晃男　柳楽鶴丸　都倉求女　大江秋月　中塚礎石

関戸宗太郎　高山涼髪　安平次弘道　渡辺暁童　平田実男　井阪東天紅　高橋尚史　辻川喜仙　浅野芳朗　川岡霊眼子　石井かんな　杉本一鶴　本多清人　浅川八郎　内藤きさ子　木村涼人　城一舟　牛島水京　唐崎専翁　奥谷弘朗　藤岡花梢　岩田美代　松本吉太郎　田ふじ　遠山可住　河原みのる　隠岐不酔　田中敏行　伊集院色　清水一保　中川晃男　柳楽鶴丸　都倉求女　大江秋月　中塚礎石　横山一声

一路集

選者
菊沢小松園
金井文秋
中村九呂平



立姿

菊沢小松園選

バスガイドさすには惜しい立姿　暁明
舞扇名取としての立姿　隆史
そう云えば立姿までうり二つ　九呂平
立姿苦労が絶えぬ背の丸味　同
衿脚が闇にきわだつ立姿　八九寸
溜息をつかせてファッションモデル立ち　万竿
立ち読みに似せて刑事の眼の動き　光郎
立姿夕陽に長い影をひき　十九平
古きずに触れさすような立姿　圭井堂
立姿さすが名取と言う扇　静波
瓜二つ母が見とれる立姿　千翁
表彰台メタルが光る立姿　句楽坊
外人へ観光用に舞妓立ち　宗太郎
湯上りの浴衣見直す立姿　初甫
縫い上げて祭りのゆかた立たして見　李鳥
あね妹何れ劣らぬ立姿　勝子
立姿俺の心をまどわせる　隆文
立姿母の形見のよく似合い　雪美
立姿三面鏡へまだ見とれ　大八州
年頃の姿斜に振り返り　晃男
嫁ぐ日の母を泣かせる立姿　どんたく
ミス日本成程と云う立姿　和三郎
立姿だんだん女らしうなり　静水
全身の写真仲人たのまれる　淀月
舞扇もう趣味でない立姿　弥生
残されたホームへ未練の立姿　同
立姿振り袖借ったようになし　萩路
サングラス素人でない立姿　秀峰
満堂の拍手に老妓立ち上り　専翁
京みやげ舞妓は背を向けて立ち　王石
初孫を妻がたすけた立姿　旭峰
婚礼の後姿も撮っておき　杏花
立姿ほめたら歩いて見せてくれ　宗義
もう一枚と花嫁立たせられ　生薑
遠くでは美人に見えた立姿　ふじ
西郷とあだ名もろうた立姿　恵二朗
舞妓いまモデルとしての立姿　同
立姿親は涙が先に出る　圭水
立姿嫁えらびするゆかた会　隆子

五客

立姿男迷わす型にでき　雄声
母ものの別れは涙の立姿　弥生
溜め息を集めファッション廻れ右　ゆづらん
立姿商売用の顔になり　雄々
仁王さん軟派は拒否と云うかたち　涼人

人

スモッグをにらんで西郷さんは立ち　ひ呂し

地

タッチの差いま真ン中に立つ笑顔　八九寸

天

帯締める音できまった立姿　どんたく

軸

初日の出冨士は日本の立姿　小松園

太陽

金井文秋選

その昔の太陽今は古女房　すみれ
太陽の沈むが如く偉人逝き　半月
出獄の朝太陽が目にしみる　周甫
秋の陽へ試歩快よい足はこび　暁明
太陽へ負けてなるかと草が伸び　同
我が太陽なりしは十年前のこと　どんたく
人種差別されそうな程夏を灼け　涼人
太陽ままに中天なるに女史パジャマ　八九寸
焼けるだけ焼き太陽に向いて立ち　九呂平
レジャーなどなく太陽にいどむ蟻　同
太陽よ見て呉れボロは着て居ても　孝正
皆既食親子総出で煤ガラス　桂仙
新婚へ太陽遠慮なく昇り　宗義
日の目見たとたん寿命のつきる蟬　圭井堂
太陽に捧げ銃する物干場　静波
太陽へパジャマのままで背伸びする　同
太陽をよける木蔭で涼を入れ　歌子
太陽と仲良く野良の草を刈り　ろ亭
太陽へ両眼細めて猫の伸び　同
陽のめぐみ受けず育った胡瓜すね　光郎
不倫の夜明けて太陽まぶしすぎ　十九平
引揚者赤い夕日を懐しみ　同
力湧く朝の太陽拝む時　隆文
翳もたぬ若さ太陽へまとも　晃男
太陽がさぼって野菜の値が上り　可住
太陽へ浜は惜しげも無い裸　春巳
太陽に追われて橋の下の釣　同
太陽微苦笑下界は雨乞いし　雄声
地下街を出て太陽にめぐり合い　和三郎
クレパスの太陽あくまで真赤なり　静水
化学もう太陽神にしておかず　同
夏の陽をさけて離れにひとり居り　たけお
日曜の日照りせっせと共かせぎ　淀月
わが太陽妻にもろうて敷かれて居　弥生
太陽様々黒んぼの一等賞　繁太郎
太陽に惜しみない肌撮るカラー　辰始
陽の照らぬ方へ並んだバスの客　萩路

太陽へあくびで起きるキャンプ村　雄々
太陽が砂丘を焦がす昼下り　代仕男
太陽が沈む静かな瀬戸のなぎ　大八州
征服をして太陽を真近に見　雪美
太陽に躍る人魚の波しぶき　祥月
太陽をはじいて玉の汗走る　千翁
太陽にこがれひまわり向をかえ　句楽坊
太陽の真下五輪を目ざす足　初甫
とりいれ〳〵釣瓶落しに陽が落ちる　ひ呂し
御来迎拝す頂上へ夜をかける　同
太陽を真下に案山子だけが居る　宗太郎
太陽がすねて夏物売れ残り　同
太陽が湯を沸かしてる屋根の上　李鳥
太陽が回って昼寝の位置をかえ　藤波
金環食五十秒へこのさわぎ　愛鳩
太陽をけとばす海女の健康美　王石
太陽を拝む野良着に朝のつゆ　生薑
さめやらぬ眼に陽炎のあやしくも　寿美司
日雇いでよし太陽と今朝も起き　旭峰
太陽が好き好き健康優良児　石峰
太陽が沈みナイター気分でる　圭水
日焼止めぐらいに太陽たじろがず　恵二朗
黒ん坊コンクール太陽をあきれさせ　同
太陽を拝み農夫の朝が明け　弘朗
眼が腐りまとすよ朝日を部屋に入れ　同
太陽のバカンスかいな梅雨になり　隆子
用もない祖父さん太陽と共に起き　光郎

佳

太陽へ美人を保つ傘をさし　萩路
太陽と起きて年寄りいやがられ　李鳥
太陽を恋い北国の子も水着　万竿
影法師小さく舗道も沸く真昼　ひ呂し
朝顔の花を朝の陽いすくめる　同

秀

ばい菌のような男で陽を嫌い　恵二朗

軸

頂上の雪太陽にほだされず

退職金

中村九呂平選

退職金貰えば会社水臭し　圭水
永年の思い出こもる退職金　杏花
退職金さてこれからを何としよう　寿美司
退職金はや子供らがあてにして　すみれ
退職金受けて出直す心意気　千翁
退職金喰いつくすまで死ぬものか　句楽坊
退職金いざと云う日へ持って嫁き　鶴丸
退職金有るうち職のよりごのみ　隆子
退職金妻をいたわる額でなし　静水
手切金うらやんでいる退職金　どんたく
他人様の退職金をふんで見る　涼人
退職金他人が心配してくれる　十九平
おせっかいオレの分まで計算し　ろ亭
近所まで退職金に気をつかい　雄々
退職金BGにある虹の夢　万竿
退職金夢にまで見た家を建て　照子
昼風呂に独り退職金の夢　光郎
あれこれと退職金に妻の夢　十九平
退職金ふところにして祖父頑固　光道
退職金皮算用の青写真　和三郎
退職金皮算用に狂いが来　旭峯
退職金が村の話題になった額　藤波
退職金待ってたように女房病み　専翁
二百万これが三十年の汗　秋月
待ちわびた退職金を見ずに死に　半月
退職金ともかく仏だん買うと決め　李鳥
退職金のもつれ遺族にひびが入り　雄声
退職金まだ働ける働ける　恵二朗
余技へ進む心のゆとり退職金　八九寸
退職金抱いて私立でまだ教え　愛鳩
退職金それから余技に凝り始め　光郎
退職金利殖に抜け目なく余生　繁太郎
退職金羊羹を喰べお茶を呑み　周甫
退職金のん気に釣をさせて呉れ　大八州
父さんの値打退職金だけのこと　春巳
退職金たばこ店からすすめられ　淀月
退職金あてに余生を買い変える　静波
退職金余生を割れば淋し過ぎ　石峰
退職金電灯もない土地を買い　宗太郎
退職金あわれ次点で落選し　恵二朗
新卒を退職金の良さで釣り　万竿

佳　句

浪人の名刺になった退職金　淀月
不便だが退職金で見会う土地　圭井堂
退職金理想に遠い家が建ち　光郎
退職金無沙汰の友が寄てっくる　淀月
一度だけ豪遊をした退職金　雄声
結婚費学資退職金を待ち　暁明
退職金さてさて使途が多すぎる　同
退職金妻のプランが大きすぎ　ひ呂し
振り出しの地位なつかしく退職金　秀峰
退職金はんぱな鶏で失敗し　淀月
退職金嫁ぎ先から無心が来　代仕男
退職金定期預金にして困り　萩路
退職金あの手この手の口が来る　晃男

人

退職金ぼろい話がやってくる　王石

地

退職金生めよふやせが今こたえ　生薑

天

退職金直ぐにも倍になるハナシ　八九寸

軸

退職金下向きの生活性に合い

大阪成びし筆
丹青堂
電話 七二・七三
色紙短冊
書画用品

明治・大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

□

大正六年（一九一七）

五月廿五日、青龍刀、第一号四六判共表紙八頁、金沢市象眼町五十三番地樋口方青龍刀社発行、編集発行人樋口勝二郎、非売品。

久流美

儲けてる尻から税がつけまわり　仙笑子

清方は理想の恋を絹に描き　光淋坊

小説に猫に妾の日は長し　蝶子郎

たまにする御留守の朝を時鳥　うみ三

薪炭屋少し傾げて叱られる

青龍刀誌には別に同人という人はありません。が光淋坊、妙子、蝶子郎、博生、うみ三の五君に一切の事務を任して金城川柳国の名を永久の物たらしめん、一の発露誌と思って下さい。

とある、大正七年四月十八日発行の第五号（四六判横綴）にて廃刊。

七月十日、ペニ、第四巻第七号、四六判二十二頁、東京都本所区石原町八十七番地紅倶楽部発行、編集発行人白石正文、非売品。

巻頭に同誌一月号より六月号までの募集吟投稿家番附が載っている、当時の川柳家の一端がしれるので抄録しておく。

行司近藤鈴ン坊、関口文象、高木可久蓮峰、金子金比古、藤沢けん坊、白石張六、島田天涯子、石谷まさる、岡埜甘太郎、窪田而笑子、村田鯛坊とある。投稿家はむせき、銀丸、武将、紅牡丹、喜世丸、夢次、銀坊、木魚、珍茶坊、可運平、茶々雄、茂坊、多賀、百栗、茶化坊、自然坊、善太郎、松男、白山人、春花、津久坊、静香、恋字、茶弁慶、紫燕、うづら、字の字、蘭平、角丸、君太郎、鬼ン鐘、茶々坊、二三、夢吉、跛行、力丸、銀風子、堤南、蓮左、呑水坊、慶坊、太の字、一閑、孝三郎、来青子、幽美、忍家、京花、清丸、柳笑、〇丸、市楽、楽天坊、光波、六角、小尺一、すゞ丸、孫太郎、芳夫、〇月、雅堂、十笑子、忍ぶ家、鬼ン棒、友仙、寿亀、平凡、照奴。

幸三郎

住替への啖呵も切れず寝取られる　呑水子

衆議院勝手な熱を吹く所

△川柳史講話▽に大正三年創刊、白石張六の春雨会と、藤沢けん坊、金子金比古、小野沢松男等の江東川柳会の合流と見るべきもので、大正期に於ける東京川柳界の寵児であったとある、大正十二年八月九日発行の第十巻第五号にて終刊、創刊月日御示教を乞う。

十二月二十日、ムラサキ、巻の一、四六倍判共表紙四頁、甲府市相生町十六番地中沢方川柳ムラサキ社発行、編集発行人甲府市百石町百七十四番地小林喬二郎、非売品。

発刊の辞に

某門外者曰く兄等はムラサキと云ふ川柳雑誌を発行するそうだが地口を僕も寄稿しやうかと、いやはゞ驚くの外なし然れども大正の今日此門外者の言味う可きものなしとせず穿ちと理屈とを解せずして川柳家なりと云ふ自称川柳家あり文字にのみ新熟語や諧大なるオドカシ的技巧を弄し句意の浅薄陳腐なるを悟らず徒らに俗ウケを喜ぶ底の川柳作家川柳選者の鼻をヒョコつかせる現今の川柳界に於て此門外者の言川柳よりも穿ち得たるを思う、吾等は選者になりたいい為に雑誌を発行するに非ず真の川柳を学ばん為なり白面黄口児の企ては先輩の指導を只管に待つのみ以て発刊の辞とす。

ムラサキ社同人

とある。

中沢紫雲

諷刺画を教師以ての外怒り　小林流鶯

御庭拝見で嫁の下見なり　柳沢江紫

其れからは男の足の遠くなり　山中捨小舟

指先で煙管を廻す長話し　小沢花狂

立ちん坊重い車をみつめてる

川柳久良岐（新江戸武良射記）

紅之助（江戸）流鶯生（川柳放言）柳沢江紫（夜半の寝言）募集吟阪井久良岐選（雑題）等が載っている。

二号（大正七年二月十五日刊）以下不明御示教を乞う。

続 川柳書架 (31)

小林不浪人句集 みちのく

★本書は小林不浪人句碑建立委員会の刊行で、巻首に、川上三太郎、竹内俊吉、岸本水府、麻生路郎、村田周魚の五氏の序がある。

★目次を挙げると、

女難の相（大正時代）動中の静（昭和時代前期）、燕雀の評（昭和時代後期）、白ダリヤ（晩年期）ちび筆（これは故人の雑筆）跋文は金枝万作氏、最後に小林不浪人略歴が掲げられている。

★昭和三十八年八月二十五日刊行。B6版九二頁。非売品。発行所、青森県黒石市大字市ノ町五〇ノ三、小林不浪人句碑建立委員会。

★小林不浪人氏は昭和二十九年一月十九日物故され青森県川柳界育ての親。

句集杉の子

大鉄川柳会

★本書は大鉄川柳会の三十周年記念句集で、巻頭に正本水客氏が「序にかえて」を書いている。

★目次によると物故者をあわせて二一八名の作品集である。

★一九六三年八月十五日発行。B6版一〇九頁。定価百八十円。発行所大鉄川柳会。

洗い髪

西谷みさを著

★本書は津可呂川柳社の主幹、西谷みさを氏の還暦記念句集である。

★昭和三十八年八月一日発行、A5版、一〇九頁。青森市米町七〇津可呂川柳社発行。

★著者は柳歴四十余年、川柳放送など担当。

川柳みずばしら

後藤ゆきを

★本書の巻頭には金子呑風氏の「序に代えて」がある。後藤青柳鬼・自選第一句集。

★一九六一年九月二十五日発行、三六版四六ページ。発行者、飯田市リンゴ並木通り、マルサンデパート横、後藤ゆきを。

第百五十一回

大萬川柳「男ぎらい」入選発表

選者　麻生路郎先生
投句総数四百三十七句
入選　五十五句

大阪　野菜
大世帯男ぎらいできりもりし

大阪　保夫
男ぎらいたった一人にある恨み

泉南　美恵子
きらいきらいと男ひきつける

奥　甦光
男ぎらいにおとこしてくれず

大阪　万里
復讐が男ぎらいにしてしまい

東京　高志
親だけは男ぎらいをまだ信じ

大阪　薫風子
男ぎらい母が男で若労して

京都　八九寸
束ね髪清楚男を寄せつけず

神戸　どんたく
訥弁が男ぎらいにはれられる

岡山　周甫
自己嫌悪男ぎらいで世を拗ねる

大阪　水京
ぬけぬけと男ぎらいとぬかしたり

羽曳野　静波
男ぎらいラッシュアワーは目をつむり

大阪　庸佑
気位いの高さが男ぎらいにし

泉大津　八郎
マスコミが男ぎらいにしてしまい

泉北　好郎
あつかまし男ぎらいと言う顔か

和泉　東天紅
ゴム長を穿いて男を振りむかず

芦屋　一ン十
女ぎらい男ぎらいをよろめかし

大阪　水客
女史ふたり男をビールの肴にし

大阪　文秋
男ぎらい売りものにして三味と生き

大阪　晃
さも穢なそうに男の手をはらい

岸和田　きさ子
よく稼ぐ男ぎらいの半ズボン

大阪　柳志
男ぎらいにされてナイチンゲール章

大阪　弥生
男ぎらいになっておぼえた酒の味

年頃を男ぎらいで母案じ

玉島　旭峯
男ぎらいの一と皮はいで見なくなり

今日までは男ぎらいできたわたし

笠岡　真奇
オールドミス男ぎらいの訳でなし

母の職娘等を男ぎらいにし

笠岡　忠三
女子大が男ぎらいにしてしまい

勿体ない男ぎらいという若さ

大阪　梅里
男ぎらいやなんてよろしくやってはる

裾　素郎
男ぎらいされど眠れぬ夜もあり

きっぱりと男と切れてから貯まり

遍歴をぼかして男ぎらいで居

トラピスト男に縁のない祈り

大阪　小松園
男ぎらい咽喉に覚えの傷のこし

心中沙汰男ぎらいであった筈

帯解けば帯も呪いの蛇に似る

岡山　東岸
男ぎらい本気で馬の骨に惚れ

初恋の破綻が男ぎらいにし

男ぎらいと聞いて叔父さんにやにやし

児島　恵二朗
男ぎらい婦人服屋でよく稼ぎ

男ぎらい扇雀だけは別ですの

しゃなりしゃなり男ぎらいとは見えず

倉敷　方大
極道の父あり男ぎらいなり

けだものと男ぎらいは決めており

いまいまし男ぎらいが美人です

五客
男ぎらい聖書と心中するつもり

羽曳野　静波

大阪　春巣
男ぎらいはじめは芝居かと思い

石川　宗太郎
男ぎらいひらりひらりと酌ぎまわり

堺　素郎
物好きが男ぎらいに振られてき

岡山　藤波
男ぎらいもう潰し値のきかぬ齢

人
男はこりごりと秋の鏡拭く

大阪　水客
男ぎらいと見えぬ湯上り

地
西宮　多久志
お師匠はん男ぎらいのまま老ける

天

昭和三十八年度（九月現在）
大萬川柳ベストテン

一	**薫風子**	一九、〇	大阪
二	**梅里**	一六、五	大阪
三	**好郎**	一四、五	泉北
四	**方大**	一四、〇	倉敷
五	**水客**	一三、〇	大阪
六	**遠二**	一一、〇	笠岡
七	**東岸**	一〇、五	岡山
八	**文蝶**	一〇、五	大阪
九	**素郎**	一〇、〇	堺
一〇	**柳志**	九、五	大阪
一一	圭井堂	九、〇	堺
一二	恵二朗	八、〇	児島
一三	真奇	八、〇	笠岡
一四	晃	七、五	大阪
一五	阿茶	七、五	大阪
一六	宗太郎	七、五	石川
一七	良	七、〇	大阪
一八	春巣	七、〇	大阪
一九	高志	七、〇	東京
二〇	雄々	七、〇	米子

以下略

次の題「**貸衣裳**」五句以内
〆切　十月十日
発表　十月二十日

十一月の予告「ケタ違い」
〆切　十一月十日
発表　十一月二十日

投句先　大阪市阿倍野区松崎町
三ノ十
大萬川柳会

—著名作家の川柳句集—

浜田久米雄著　麻生路郎序

定価300円
送費50円

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。

★出版予定日。十月初旬

★六〇〇部限定版につき御申込は早く。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）

大阪市住吉局区内万代西5丁目25
発行所　川柳雑誌社
電話大阪(6081)振替口座大阪75050

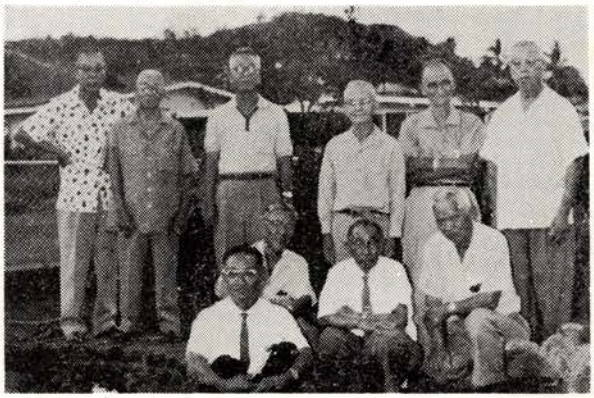
柳界展望

——啞三味氏来洞——

高須啞三味氏（東京都）は八月十八日来阪不軌洞を訪問路郎主幹と歓談された

句会

▼本社十月句会は七日（月）午後六時から千日前電停前自安寺で開催。秋灯下句箋を手に句三昧のひとときを持たれるよう柳友お誘いの上ご出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳句会（大阪市）は九月二十五日（水）午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼七面短詩文学クラブ（和歌山市）川柳部句会は九月十一日（水）午後六時から奥新和歌浦魚又楼で開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は九月二十七日（金）午後五時半からコクヨ株式会社会議室で開催。▼南海電鉄句会（大阪市）は九月十九日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼大阪逓信病院川柳会九月句会は二十八日（土）午後一時から北館五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼堺市文化祭川柳大会は十一月二十四日（日）午後一時から堺市大小路大阪府労働会館で麻生路郎本社主幹を迎えて開催、川雑堺支部主催。▼第六回関西短詩文学作品展は九月三十日（月）から十月五日（土）までの六日間、午前十一時から午後七時まで毎日ギャラリー（北区堂島毎日会館地階）で開催、川柳家多数の揮毫作品が出品される。▼池田可宵氏法務大臣賞受賞記念川柳大会（長崎市）昭和三十八年九月一日（日）午前十時から浜口町国際文化会館二階ホールで開催し、盛会だったと▼番傘川柳本社（大阪市）の創立五十五年祝賀会番傘一万句集出版記念会は昭和三十八年十月六日（日）午前十一時から大阪中之島大阪中央公会堂で開催。▼川柳岡山支部八月例会は十七日、岡鉄クラブで開催、九月例会は十四日伊丹よしお居で開催。▼第六回近畿川柳大会（竹原市）は九月一日春華園で開催されたが百四十名の出席者、八十名の投句者を得て極めて盛会であった。▼富柳会（富田林市）九月句会は七日（土）午後七時から市立公民館で開催。▼第十二回中部地区川柳大会（名古屋市）は九月八日（日）正午から中部日本新聞社四階ホールで開催。▼第九回全九州川柳作家大会は九月二十二日(日)午前九時から福岡市因幡町NHK福岡放送局第一スタジオで開催。▼全北海道川柳年度賞が設定され北海道全川柳吟社が参加、年間最優秀川柳作家を選出することとなった。川上三太郎氏の肝煎りによる。▼第一回三陸川柳大会（宮古市）は八月二十五日午前十時から宮古市役所会議室で開催。▼川雑岡山支部主催、岡鉄地区倶楽部文化部秋季川柳大会は浜田久米雄著、句集「凡人」発行記念祝賀会を併せて十月二十七日（日）正午から岡鉄クラブで開催。▼川柳誌せんば（大阪市）創刊十五周年記念祝賀川柳大会は昭和三十八年十一月十日（日）正午から天神橋南詰一丁南、薬業健保センター四階大講堂で開催、兼題、腕・最高・母・文学・雑詠、投句は葉書で各題別に明記の上、十一月五日までに大阪市阿倍野区北畠西一ノ二二せんば川柳発行所宛。



若本あき坊氏（ハワイ）**の新居落成祝賀パーティー**を兼ねウィロー社七月句会が催された。前列―鹿舟、中列―左から快歩・起峯円、後列・魔花麗・拝山・柳葉・狩平・桑木・羽里歩の諸氏。北海氏は遅れて出席。

消息

▼麻生路郎主幹は九月五日（木）午後二時から、理事をしておられる大阪芸文協会の第百十三回講演会で「川柳あれこれ」と題して講演、会場の生国魂神社社務所を埋める会員多数が傾聴した。堀風船堂氏（大阪市）も出席された。又、英国詩人エドマンド・ブランデン氏を囲む文芸懇話会、講演会、歓迎晩さん会が八月二十六日午後五時から国際ホテルで開催されたが、路郎主幹は親しく歓迎の意を表された。九月二日（月）午後四時から中央公会堂で大阪市文化祭川柳大会開催についての打合せ会に出席。第六回関西短詩文学作品展（別項記載）、並びに山陽新聞社会事業団主催の歳末同情義金書画工芸展などへ出品の新揮毫作品制作にいそしまれた。▼橋本緑雨氏（大阪市）は軽い脳溢血で自宅療養中の身はまだ入浴の許可も出ないが、日常の起居にも漸次自信を取戻し、九月二十五日の七十一才の誕生日には散歩にでも外出できるものと期待していられる。▼岩崎愛二氏（京都府）は八月三十一日、スポーツマンほろにが会の元気な若者と同道、阿波踊りに参加された。数年前路郎先生を押し立てて川柳雑誌社連で徳島に乗り込んで以来の阿呆ぶりですかいて」▼西尾栞氏（大阪市）は八月二十六日夫人同伴で、野沢・志賀高原・渋・万座など五泊六日の旅を楽しまれた。「信濃路や一ト月早い秋の花」▼大鶴喜由氏（京都市）は市場没食子氏が停年退職されたので共に川柳を語る機会が頓に少くなり淋しい限りですと。▼阿部佐保蘭氏（東京都）は次男の大学入学、初孫誕生、句集

編纂などのうれしい疲れがどっと出たので、人間ドックに入り健康に留意して、再びダッシュする日を期していますと。▼米沢暁明氏（大洲市）は学校長として夏休みを静かに送り、学校を守っています。唯、三日間、高知、足摺の旅行に出たのみですと。渡辺暁童氏（愛媛県）は九月下旬になると町民運動会の企画と準備にかかり忙しくなります。路郎先生ご揮毫の句の手拭が出来るのを心待ちにしておりますと。▼月原宵明氏（今治市）は八月二十六日兵庫県宝塚市の宝塚ホテルでのロータリー一日講習会に出席された。▼堀風仙洞氏（大阪市）は八月十七日から北海道各地を巡遊、アイヌの踊りに堪能された。登別温泉から「二時間余で来た空の旅あっけなし」▼小西雄々氏（米子市）は九月一日竹原市での近県川柳大会に出席、静水・久米雄・白溪子・紅月・永断・季賛の諸氏と交歓、広島に立寄り、原爆堂をはじめ十年振りに見る復興した夜景を格別な思いで眺められた。「来年も来る約束で握手をし」▼山田季賛氏（高槻市）は八月十四日新幹線モデル線の試験列車に家族同伴で試乗、時速二百粁の高速を満喫された。後、小田原、箱根、芦ノ湖めぐり、熱海で一泊、東京を見物された。「子供らと来て楽しかり熱海の湯」▼大谷月都氏（大阪市）は級数的な飛躍を続ける会社について行くために精一杯の努力が必要であったので、川柳から遠ざかっていたが、歌ごころを忘れた訳ではないので、秋灯下研鑽致す所存ですと。▼川岡霊眼子氏（諫早市）の特技である十秒間で書く龍の一筆書きが新聞に紹介されたので目下NHKからの出演交渉を受けておられる。▼石曽根民郎氏（松本市）は九月一日東奥日報社主催の青森県下川柳大会特別選者として迎えられ「風土と川柳」の講演をされた。二日は雨の十和田湖へ。昨年路郎主幹が泊られた浅虫温泉の宿の同じ部屋で工藤甲吉氏（青森市）と歓談された。▼黒川紫香氏（豊中市）は八月十二日をもって京阪神急行電鉄KK倉庫課長の職を定年退職された。▼池田正三画伯（大阪市）は五月以来訪欧米の旅を続けられ、七月末無事帰国された。▼藤村〆女さん（大阪市）は九月十日上京、鎌倉江之島を観光、川雑九月号掲載の富士野鞍馬氏執筆の「弁財天」を参照しながら、岩屋の中の弁天様を拝しましたが、十四号台風の前ぶれで波しぶきが大変でした由。▼福田丁路氏（高槻市）は九月十三日夫人同伴で那智へ。豪壮・幽邃・壮麗、滝と西国第一番の札所青岸渡寺の印象には心うたれます。白浜で一泊された。「那智の滝心の雲を吹き飛ばし」▼西辻竹青氏（奈良県）は八月十五日から徳島県奥浦で静養、四十年以前の軍隊生活当時に来た漁師町をなつかしんでおられる。二十一日には空路上京、国道協議会に出席、二十四日塩原温泉で清遊された。「上京も大臣受身で聞いてくれ」▼中島紫痴郎氏（長野県）から、高峰柳児氏の一人息子さん（信大卒二十四才）が体操の先生で、五輪の選手に出るとて猛演習中、心臓麻痺で急死されお気の毒に存じ、「雲の峯くずれて消えて寒い風」と頼りに接した。遙に冥福を祈る。▼田中鳥雀氏（京都市）は六月二十六日、頼政神社お祭の日に、源三位頼政卿の頌徳抄、「歌徳」を出版、知人に頒布された。

句集

▼句集「杉の木」が創立三十周年を記念して、昭和三十八年八月十五日、大鉄川柳会から発行された。正本水客氏の定年退職を契機に編集、百五十余名の句五句づつが掲載されてある。定価百八十円。▼故小林不浪人句集「みちのく」が、昭和三十八年八月二十五日青森県黒石市大字市ノ町五〇ノ三小林不浪人句碑建立委員会から発行された。川上三太郎・竹内俊吉・岸本水府・麻生路郎・村田周魚諸氏の序がある。B6版百頁和綴じの瀟洒な装幀本。実費、三百五十円。▼西谷みさを著句集「洗い髪」が昭和三十八年八月一日青森市米町七〇津可呂川柳社から発行された。巻頭句に「一握り」しかない母の洗い髪」があり、序に、亡き父母にこの句集を捧げたいとある。「考えと別な力で墨はすれ」「花便り畳に眠る癖がつき」などの句がある。A五版百四頁。

弔

▼菅楯彦氏（大阪市）は病気療養中のところ九月四日死去、八十五才。告別式は中馬市長葬儀委員の下に十一日午後二時から四天王寺本坊で営まれた。関西日本画壇の重鎮、大阪市名誉市民謹悼。

転居

▼唐崎専翁氏（芦屋市）は芦屋市翠ヶ丘町一六七の一に転居。電話芦屋②局六二八二番。▼柳楽鶴丸氏（松江市）は松江市東奥谷町一九、舟木方。

電話開通

▼後藤梅志氏（大阪市）宅に電話開通した。六五一局五五三二番。▼田中狂二氏（堺市）経営の工場に電話開通した。田中製作所電話堺②局六一九三番。

不朽洞会から

☆常任理事会――九月十九日（木）午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。
一、新選者選出について
一、記念事業について
一、その他
の案件につき協議、選者選出については路郎師から選出の指針を語られ、候補者について慎重審議した。午後九時過ぎ散会。出席者は、路郎師・生々庵・梅里・小松園・恒明・柳宏子・薫風子の諸氏と多久志。（多）

不朽洞の人々

大阪市交通局勤務の児島好夫氏

血筋でもあるまいやろにお人好し

（与呂志）

出来る出来ないはあと廻し、とに角頼まれたらいやといえないで引き受けてしまう。結局小心だからだろう。

そんな時にブツブツぼやく妻だが、そのくせにこんなようむない処が妻も似ている。似たもの夫婦というのか。

娘三人も皆んなそうらしい。人の世話を喜んで出来る倖を知っている妻や娘を見ていると満足を覚える。

家の中に笑いの絶えないのもこんな処から来るのかも知れない。私の句会の出席を気持よく送り出して呉れる妻と娘の自慢もしときたい。

花地物壇

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 川柳忌句会（大阪市）

9月10日　午後6時

会場――　千日前自安寺

一七三回目の、祥月命日に当る九月二十三日の柳翁忌を前に、十日の本社句会は、毎年の事ながら、A・B級台風の進路低迷の折りである。しかし、川柳句に挑む我々の一路は、楽しく邁進あるのみ。新人の見える事も女の方の顔のふえる事も、嬉しい事だ。本日の柳話は、中島生々庵氏で、専門の医術と迷信に付いて説かれ、路郎師は作句上誰もが思いつく句は避けるべきだと諄々と述べられた。本日の不朽洞杯は、不計も、私が頂く光栄に浴した。

（摩）

出席者――路郎、白溪子、摩天郎、黙平、千代、八郎、野菜、城東、静馬、文秋、舟遊、専翁、狂二、文蝶、すゝむ、保美、恒明、正一、井平、判志、三猿坊、野迷路、滋雀、たつみ、圭井堂、水客、句楽坊、柳志、水京、多久志、柳宏子、生々庵、弥生、美津子、進之助、梅里、庸佑、みさ子、三司、一栄、清子、明子、秀子、小松園、薫風子、栞、白柳、宏子、葭乃、

兼題「軸」　麻生路郎選

軸いまだ売れず生活はままならず　日出男
悲しみの極に軸売る日を選び　日出男
浪人三年逢暦の軸に見下され　柳志
ほめとけば間違いなかろう床の軸　恒明
掛軸もかけるとこない家に住み　美弥子
家康の軸にテレビを置く時勢　摩天郎
洋室へ家宝の軸の掛け所　狂二
友来る日なり墨絵と掛け替える　黙平
掌へ筆勢真似る軸の前　黙平
本物のつもりで客も褒める軸　小松園
軸にしても一度書家へ礼に行き　保美
駅前の旅館とにかく軸をかけ　栞
久しぶり父の遺愛の軸を掛け　すゝむ
床の軸墨痕淋漓だけわかり　静馬
軸にある立場失言ゆるされず　恒明
春夏秋冬日の出に浪の軸をかけ　梅里
愛情の軸にフトしたひびが入り　生薑
一幅の軸が支えている家風　旅風
軸掛けて青い眼和服で独り悦　繁太郎
軸かける床を洋服占領し　どんたく
軸も変へ花も活けたがだれも来ず　宗義
歴代の興亡軸は知ってをり　すみれ
こわれものように家宝の軸を見せ　雄々
塵一字茶掛けの昼を虫すだく　八九寸
新築に大掛軸がうれしくて　寿美司
掛軸にかくす前歴の黒い影　光道
主客ともに読めぬ漢詩の軸を褒め　小松園
大観の軸も学資に売りました　摩天郎
掛軸へ子なき夫婦の目が静か　たつみ
退官のもう掛軸もかけ変はり　柳志
蚊いぶしへマッチの軸が短かすぎ　高志
中軸打線不振が因と評に書く　判志
床の軸はめる苦しさ社長宅　三猿坊
掛軸を持ち出してくるリバイバル　たつみ
石摺りは読める表装だけをほめ　三司
掛軸へ孫のクレパスはら〳〵し　一栄
先客のとおり賞めとく床の軸　静馬
飽きもせず軸を眺めて小半日　千代
独楽廻し軸一本で暮らし立て　三猿坊
抹消の数だけ押した筆の軸　野菜
ほんものの軸は単箇にしまっとき　生々庵
西国の集印軸にして余生　天樹
床の軸貰めてセールスぬかりなく　あいき
運命の捨てられる軸喰べる軸　阿茶
床の軸読めず読もうとせぬ時代　一ン十
佳き日柄大観の軸が灯をはじく　六竜子
軸どころかいなアパート一間きり　文秋
ペン軸の汚れも知らぬ部長席　柳宏子
文化住宅家宝の軸も日の目見ず　みさ子
国宝の軸三筆を硝子越し　進之助

兼題「女世帯」　土井文蝶選

女世帯矢張り巨人の阪神の　高志
十三夜女世帯は食うばかり　光道
夜廻りへ母娘世帯のッケ届け　八九寸
なごやかさ女世帯の京都弁　寿美司
甥が来て女世帯にひびが入り　天樹
カーテンも女世帯の柄で垂れ　どんたく
自動車は女世帯とは知らず　小松園
大屋さん女世帯をかばい過ぎ　三猿坊
生活保護断わる母の働き手　狂二
猛犬が居りますと書いて置寓居　進之助
集金人女世帯をほめそやし　生薑
ボスの瞳に女世帯と云うつけめ　六竜子
寄附の時だけは女世帯です　柳宏子
真夏でも女世帯はくめ切って　圭井堂
冬仕度終えて母娘の水いらず　多久志
女世帯ご用きゝにも好き嫌い　三司
痩せ腹と見えず女将の肥りよう　野菜
標札の男名前は二年生　あいき
男気は犬一匹と云う暮らし　どんたく
女世帯いつもさぐりを入れられる　生薑
女世帯宵の内から鍵をかけ　井平
女世帯回覧板は読み返し　梅里
女世帯になって小金が貯り出し　文秋
父還る女世帯に灯がともり　日出男
井戸端は女世帯に矢を向ける　三猿坊
女世帯巡査感激してかえり　摩天郎
女世帯時々旦那来やはるけど　狂二
又金の置き場所変える女世帯　小松園
女世帯乂居候がころげこみ　清子
女世帯ですかと交番腰をかけ　清子
女世帯へ一桁下げた奉願帳　一栄
女世帯に飼われ押売りへは吠えず　白溪子
女世帯だなあと仏壇の灯がゆらぎ　生々庵
女世帯皆別々の貯金帳　柳志
女世帯小いさい義理も手を抜かず　文蝶

兼題「ゴム長」　吉田圭井堂選

ゴム長の病夫代理がいたわられ　八九寸
ゴム長が朝の手配をする飯場　文蝶
ゴム長が鮮魚に見える水をかけ　一栄
股貫のゴム長鮎の瀬をわける　一ン十
ゴム長がずらりならんだ縄のれん　どんたく
非番日をゴム長穿いて野良に立ち　白溪子
ゴム長を履けば女も気が強し　三司
みずたまりばっかり選って戻って来　小板園
ゴム長を買えばカン〳〵照りつゞく　小松園
表彰をされてゴム長まだ脱げず　柳志
ゴム長で男に負けぬ仕事ぶり　井平
ゴム長で来て大臣の如才なし　柳志
ゴム長を胸まではいて鮎一つ　舟遊
ゴム長で来て玄関が立派すぎ　生々庵

鳥取砂丘にて

ゴム長を貸して砂丘に養われ　狂二
ゴム長の世界になれて遺児を抱き　宏子
事故現場黄のゴム長が目にいたし　城東
ゴム長の女丈夫で帆前掛け　多久志
ゴム長で別宅行きとは知らなんだ　静馬

ゴム長で魚を見切る声を 上げ　文秋
防火訓練ゴム長でむっつり老社長　生々庵
ゴム長の女将素顔で河岸へ来る　舟遊
ゴム長がせわしく動く魚市場　庸佑
長靴が先頭でゆく草の道　あいき
長靴の買出し南でならした妓　阿茶
ゴム長で陣頭指揮と云うポーズ　恒明
ゴム長に踏まれて友禅あくが抜け　静馬
ゴム長で蹴って鮪の鮮度褒め　専翁
ゴム長で来て消毒のようしゃせず　舟遊
ゴム長へ女の線をおしまれる　宏子
ゴム長に一家眷属ぶら下がる　圭井堂

兼題「黒猫」　八木摩天郎選

黒猫を呼ぶ停電の子供部屋　天樹
黒猫を膝にパトロン待つ二号　繁太郎
黒猫も飼い未亡人ひそと住み　文秋
条件をつけて黒猫呉れてやり　柳志
黒猫が見ていた秘密四帖半　滋雀
未亡人猫迄黒を飼うつもり　一舟
黒猫も飼うて祈祷師よくはやり　柳志
密談の最中のっそり黒い猫　多久志
黒猫の縁起をかつぐバーのママ　梅里
スリラーの中で黒ネコ魔性めき　柳宏子
黒猫も頼る縁起のマスコット　進之助
時代劇に出る黒猫は恐れられ　白溪子
黒猫へ幸福が来る信じよう　宏子
白が黒産んで親猫見直され　静馬
マスコットにされて黒猫船の旅　狂二
バー黒猫場末の奥にうらぶれて　すゝむ
犯人を黒猫だけが知って居た　千代
折も折黒ネコ不気味な事故現場　柳宏子
八ミリに黒猫一所に入れてやり　みさ子
くらやみに黒猫ふんで飛び上り　城東
ブラックキャット何んやバーの名か　清子
黒猫を膝に女優のインタービュ　雄々
黒猫をせい一ぱいの貧に飼い　生々庵
妾宅の不平黒猫知りつくし　専翁
航海の無事を祈って黒い猫　文蝶
黒猫の縁起を笑うほどに癒え　水客
黒猫を抱いてマダムにひまがあり　多久志
猫黒く生れて玉の輿にのり　保美
現場検証黒猫の瞳に光るもの　摩天郎

席題「無口」　若本多久志選

親方もてこずる無口呀えた腕　滋雀
本当に無口ですのと良くしゃべり　千代
プロポーズ無口どもってふるえ出し　狂二
本当の無口酔うても寝て仕舞い　白溪子
何時からか無口になった反抗期　一栄
十代の無口目顔でほっとかれ　水客
とりまきが去って無口の手の早さ　梅里
不言実行ですと無口の二人　生々庵
とっつきにくい奴と無口は見られ損　恒明
無口にもおなりでしょうよ適齢期　八郎
二次会も無口は独り忘れられ　摩天郎
年頃になって無口の子にかわり　弥生
珍らしい父の無口にかしこまり　すゝむ
寄り道をかくし切ろうとする無口　恒明
無口でもすみにおけない女ぐせ　みさ子
金が出来たらしい無口喋り出し　三司
苦しさに耐へて青年無口なる　舟遊
平常は無口にらみもきく社長　進之助
マイクへは無口すぎた勝力士　野迷路
出す段になると無口になる男　梅里
父親を無口にさせた金づまり　弥生
足音で反発してる無口の娘　一栄
初対面無口同志で茶をすゝり　柳宏子
ご養子が無口な方で円くゆき　多久志

席題「ちやほや」菊沢小松園選

七光りちやほやされる芸でなし　圭井堂
ちやほやも金のぬくみのあるあいだ　梅里
ちやほやは船場の店がある故に　野菜
ちやほやと持ち上げてから金の事　文蝶
ちやほやで線の細い子に育ち　梅里
脱線はせずちやほやをうけ流し　恒明
ちやほやの後は結着買わされる　黙平
ちやほやとされたが結局握手だけ　保美
ちやほやと云われほんの夢中なり　静馬
ちやほやとして本心うたぐられ　柳志
おべんちゃら受ける貫禄ついてくる　水客
幹事だけちやほやされて足を出し　白溪子
ちやほやともてゝお金の要る話　摩天郎
ちやほやとされたも若い頃のこと　摩天郎
将を射る馬にちやほやしに戻り　柳志
ちやほやとした男ともう別れ　静馬
ちやほやをされて本当の友がいず　白溪子
思わくのあるちやほやと知って受け　庸佑

席題「横座り」　傍島静馬選

女の線あらわに出して横座り　清子
やれやれというおちょやんの横座り　栞
横座りふれれば落ちん姿なり　文秋
横座り女は拗ねて拗ねている　進之助
倦怠期色気も失せた横座り　文秋
何もかも許してからの横座り　小松園
横座りうちわの風を斜に入れ　白溪子
横座り昔の色香まだ残り　水京
横座り女あまへる事に馴れ　三司
横座りして耳打ちが長いなり　水客
どうにでもなれと女の横座り　文蝶
横座りスラスラ嘘が出てこない　水客
横座りしたいお茶席のしびれ　清子
横座りスカートが足らぬ膝小僧　生々庵
横座り世間話の長いこと　摩天郎
冗談の出たきっかけに横座り　柳宏子
里帰へり心のヒモ解く横座り　弥生
三部経なかばを過ぎた横座り　小松園
横座り嫁入り前を叱られる　三司
横座りそろそろ無心の顔になり　生々庵
横座りうれしいものが縫上り　摩天郎
横座りショートスカート味気なし　静馬

雑川　**阿倍野支部句会**（大阪市）　金井文秋報

十代の感覚あっさり身も許し　良
みだれ髪見られたくない床をあげ　梅里
水引がたんとかかったうたい振り　圭井堂
本わさび見せてるだけのにぎりずし　好郎
月謝とは別に気になるつけどけ　静馬
丸出しに云うてそれから溝が出来　一栄
裏話聞いて親しみ安くなり　文秋
サンプルとえらい違いのエビフライ　恒明
あっさりと見切る商売馴れた腰　生薑
みだれ髪梳けば土俵の砂がおち　柳志
裏話の裏まで知らぬ若さなり　小松園
雌伏十年まだ本物に遠い芸　珠笑
本物の貫録黙して語らず　八郎
通ぶって本物までも贋にする　柳宏子
身代りのつらさ本物知っていず　一舟
信頼を裏切られたる裏話　白柳
本物はウインドの中遠い夢　清子
買わんなと見抜き本物出しぶり　文蝶
怒らしてあっさりしいやとなだめて居　野菜

食品と原資材機械包装の総合誌
食品と科学
Food Science
本社　大阪市北区源蔵町5 (361)9373代
支局　東京都千代田区神田鍛冶町2 (291)9629代
名古屋市昭和区村田町2 (88)9069

本物へ未練やっぱり手離せず　弥生
裏をかくつもりあっさり負けておき　秀子
国なまり丸出しにして皇居前　東天紅
裏話聞いて信心熱がさめ　双楽
ここだけの話と裏を言いふらし　藤内
丸出しの関西弁が縁となり　文隆
コレクションみな本物のように見え　さかえ
キズ一つ有って本物だと解り　宗義
丸出しの方が誠意の人だった　寿美司
月謝とどこらせ赤旗を振り　万里

川雑　**玉造支部句会**（大阪市）　西出一栄報

二三枚残してカメラ貸してくれ　梅里
手荷物にならぬ土産を選って買い　清子
手荷物へ切符うっかり入れてまい　あいき
朝五時に起きる家風が気に入らず　六竜子
明日のダム夢見る発破のキィを押す　生薑
あせる程損な工事は手間が要り　白柳
近代化どこの工事も地下を掘り　喜久堂
上を向いて歩こうここは工事中　文秋
銭湯をプールがわりに場末の子　八郎
血のにじむレッスンでプール水しぶき　詩朗
ビニールのプール我が家の避暑プラン　柳宏子
浮き上る足をひっぱるプールの児　風仙洞
お父さんの手荷物持ってにがい顔　美知子
つまずきを父は黙って眺めてい　秀子
信心の父をなだめて医者にかけ　国雄
離別した父は死んでることにする　句楽坊
父は子供を叱りつつ母に子供をいたわりつつ　天真
何事にも怒らぬ人でこわい父　井平
父さんの風呂十九円では高すぎる　城東
父のないプラスも云えるまで育ち　珠笑
父親の財布千円抜いたとて　一栄
逢えばすぐ痩せてることを父叱る　一舟

川雑　**京都支部句会**（京都市）　田中烏雀報

地獄極楽神秘の奥に存在す　親生
ほんとうの神秘盟で泣いている　磯
バイブルのどの頁にもある神秘　紫蘭
赤白を螺旋に佳き日へ巻く柱　紅鳥
螺旋螺旋人造人間のはらわた　烏雀
螺旋階段獣下り皷動恋と知る　生薑
命令で散った男の墓まいり　幸男
いじらしく命令をきく警察犬　句楽坊
命令をした過去ふれず守衛室　王石
砂と湯と素足の唄を聞いている　ゆきら
氷雨の中の素足となって明日も生きる　白史

川雑　**ハワイ支部句会**（ハワイ）　築山快夢起報

お客様本位は看板だけのこと　快夢起
女客ベルを押すにもしぐさ見せ　暁舟
閉店を狸寝入で稼ぐ客　三石
客がほめまた一つ減る棚の鉢　静杉
お客ごっこ祖母ちゃん中に座らして　峰円
観光客鴨と云う眼で見られて居　魔花麗
先客のぬくみ座ぶとん辞退する　笑有
客乗せて走りや後からポリス追ふ　紅茶
見るだけは金はいらぬと客をよせ　あき坊
左前よく来た客も遠くなり　カロ女
女客来てから男はっとかれ　泉水
女客ひそひそ話に落ちてゆき　平八郎
客足も絶えてネオンに更ける町　紅溪
愛称で呼び常連を縛っとき　斧平
里帰り今日は生れた家の客　柳葉
酔はれては始末に困る女客　拝山
珍客のもてなし一家総動員　エス子
脂粉の香残して女客は去に　万里歩
招かざる客の苦言が身にこたえ　浅太

川雑　**岡山支部句会**（岡山市）　浜田久米雄報

親友と割かんにする請求書　美舟
請求書ボーナスまでは払わぬ気　照路
御指定の日の請求書待たされる　始ん坊
常連へ上様で来る請求書　鮫虎狼
請求書ふんふんふんと受取られ　宗義
請求書らしい封書は放っとかれ　胡風
請求書儲かりまっかあきまへん　秋月
身に覚えないのも請求書にかかれ　哲郎
請求書出さず毎月顔を出し　ごろう
請求書店で呼ばれる名前でき　佐加恵
請求書すぐ払えぬはわかっとり　久米雄

川雑　**備前支部句会**（岡山県）　横山一声報

満ち足りた生活をきけば愛に飢え　宗義
職人として満足はまだ出来ず　一声
親だけが満足に聞くけいこ三味　伊久野
満足であってみたないホームバー　芝月
満足に歩けぬ孫に歩かされ　幸仙
棟梁がお伊勢参りに酔うて居り　正州
満足なくらしの出来ぬままに老け　弥寿子
まっすぐに帰る養子に満足し　真奇
満足口が聞けない握手攻め　東岸
満足な寝顔乳房をまた咥え　胡風
浮気した夢ほんとなら倦怠期　賤女
いい夢を見ているえくぼ笑っとり　久米雄
夢のよな話へ金策のって来ず　良江
夢の様な話へも一度念を押し　あやめ
ドライブの夢を背負った貯金箱　卓久
妻にだけ昨夜の夢を話して見　浄美
子の夢かなえてやれぬままに老い　秋月
母の夢見て孝行のおそかりし　のぶ子
我が夢のかなわぬ所を子に望み　美枝子

川雑　**八代支部句会**（八代市）　佐野ト占報

流石に美人けさ新聞へ出たモデル　民也
云う儘になってモデルは金を貯め　実信
一線を引いてモデルの役つとめ　末子
年よればモデルも唯の一婦人　民也
鳥肌でモデル冷房耐らえてる　生薑
モデル校先生も生徒も偉く見え　蘇園
哀愁をそゝるモデルに気をひかれ　道雄
愛してはならぬ思いをモデルだき　ト占

川雑　**米子支部句会**（米子市）　小西雄々報

貧富の差身分を越えて恋みのる　鶴丸
失恋の笑う余裕をとりもどし　昭夫
横道にそれた話しに袖を引き　一笑
雨が好き冬が好き想出もつ私　みどり
三階の隅に温泉風呂が湧き　雪外
手品では返せぬ借金居催促　素瓢
手品師のようにかくしたラブレター　一正
満員御礼でも指定席空いており　秀峰
いいとこで手品をやめて薬売る　伯雲
酔えばすぐ一つ覚えの手品をし　無閑
手品師が善男善女の目をかすめ　忠三
大雨のニュースをよそに米をとぐ　昭子
現金に心をゆるす梯子酒　祥月
気兼ねなく食べと言われてよう食べす　雄々

川雑　**木次支部句会**（島根県）　藤井明朗報

玉の汗ふかず名優舞台おり　清泉
汗ふいて用件切りだせず富雄
花火見るよりも二人でいたい仲　和幸
照れかくしそっと押える鼻の汗　信夫
優勝の汗と涙を拭く拳　綾美

寄り添うた二人を浮かせ花火消え　明　朗
夏の風邪汗してなおす気にならず　勇

雑川　宇部支部句会（宇部市）

津秋六花報

大安といわれ出雲さん御出張　盤　茶
神様が縁を結んだのに離別しげる
悪縁も出雲の神様声掛り　玲　子
牛に牛連れを出雲の神見つけ　実　男
オールドミス出雲の神様留守らしい　羊　歳
恋愛の速度に出雲追いつけず　東　村
捨て場ない文句を出雲の神にいいてる子
神様の脇見の隙に出来た縁　頼　子
気心が出雲の神のお気に入り　月　想
添いとげてから出雲の神がほっとかれ　六　花

雑川　篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼報

虫の喰たオーバーまたも物語り　一　葉
掌の虫とあそんでバスを待ち　ひか子
絶叫の声ともしらず虫を褒め　永　断
立秋の月まちがえず鳴きはじめ　可　住
腰おろす土手のアベック虫が刺し　枝　葉
土用干し自慢衣裳に虫が付き　てつ子
泣きつつら虫歯かかえて待つ長さ　村　雨
亡き母の着物虫干しだけに見る　実　世
長話し蜻蛉が肩で一休み　初　音
無垢の肌虫大胆に触れてゆき　無　聖
きょうだいの中に一人が虫喰らい　みのる

杏林川柳会（大阪市）

中島生々庵報

年頃のバカンス親をけむたがり　太希志
働いてへとへとバカンスでくたくた　野迷路
再会は互に出世する積り　珊枝郎
再会の望みをかける病上り　一　哲
再会も妻へ気兼ねでそっけなし　小　石
こんな筈でなかった再会のデスマスク　生々庵
再会の話題は弾のすさまじさ　阿　茶

コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

スピードをピタリと止めてアヒル行く　昭　一
にくたらし割り込んだ手が席をとり　広　彦
割込みに文句も云えずはたを見る　理　休
ゆうれいまでわりこませた奴が当選し　武
呑んだときぐらいのファイト出してんか　留　鈍
よせばよいのにファイトもやしてケガをする　松　井
旅情などとつくに捨てた「こだま」族　瑳　巳

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻　圭水報

安全灯ゆらぎ列車は除行する　句念坊
安全と見た高級車の酷い事故　専　翁
家内安全五円銅貨で済ましとき　和　郎
安全を犬一匹に狂わされ　圭　水
スロモー安全運転と思うとり　八　郎
非常ベルテストのようにいくかしら　宏　子
安全のぎりぎりまでが若さにて　路　郎

あすなろ川柳会（大阪市）

山本素郎報

気まぐれな恋とも知らず入れあげる　梅　里
気まぐれのつもりのパチンコ熱が入り　水　邦
七夕に幸の願いのいじらしさ　武　男
七夕も忘れるほどに子は育ち　しげ子
牽牛に貸してやりたい宇宙船　百　酒
土用干あせたる妻の裾模様　酔　泉
同僚の出世素直によろこべず　幸　児
ちょっぴりと妬いてみるのもテクニック　尤　三
嫉妬とは孤独なものよ天の川　ゆきを
仲人の下駄を揃えるいい返事　慶之助
ヤキモチを公開身上相談欄　素　郎

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

アユ茶屋の奥でしっぽり意気な恋　紅　月
長良川う匠のさばきほめそやし　笑　照
アユ漁りにかこつけ来る酒の友　菊　代
アユの茶屋泊る気でくる二人づれ　きはち
鮎解禁一方的とアユあわて　栄一郎
つけ馬がパパとアユずし送って来　美　代
逃げ腰へ奉願帳の筆おろし　吉太郎
逃げ腰でこわごわのぞく土左ェ門　幸　吾
逃げごしの膝へ年増のようたぶり　東雲楼
逃げ腰の女へなおも念を押し　静林庵
逃げ腰へ負けときますとメリヤス屋　摩天郎
血と汗と涙で綴る半生記　半　月
花嫁の汗いたわられいたわられ　花　梢
夕涼み祭りダイコに呼び出され　まさる
夕涼みどころか暑うおす御両人　八　郎

諫早川柳会（諫早市）

川岡霊眼子報

荷ない得ぬ名刺肩書裏に刷り　俊　晴
犬の子を貰って家族一人ふえ　良　隆
番犬も昼のデートで夜ねむり　薫　風
愛犬は主人を逆に引廻し　嘉　象
捨てられた犬も毛並みで育てられ　美寿栄
つながれた紐の長さに犬は生き　雄　三
やせ犬を出戻り娘よく肥す　茶　人
バラ咲く日こっそり出して見る名刺　乙　女
栄転に嬉しさこぼれ名刺出す　一　男
名刺なお肩書の儘失業す　霊眼子

明和川柳研究会（西宮市）

樋口舟遊報

米の水澄んで女にあきらめがくる　新　子
洪水の飲めない水がありあまり　弦　月
都にふくれあがったにいい水飢饉　す、む
水の流れに立てる郷愁　牧　人
そうめんの水が食卓に涼を呼び　民　子
水玉の模様が好きで孤独なり　菁　風
水の蒼さにエバの心が　夢　虹
一流になれば女流もたじろがず　半　歩
女流女流と一寸下に見る　鮎　子
女流作家美貌が瑾になってくる　薫風子
これからと云うとこから北に入り　三　舟
どうしようふたたへ午后の陽が余り　かつみ
生き甲斐はこれから空へ空へのび　梅　志
「情熱」でおくれを取る
江戸の仇長崎で討ちたい雑魚もおり　生　蘆
雑魚釣って帰ればアヒルの餌にされ　九州男
ひとくちにほほばる雑魚はぎらつきぬ　鮎　美
雑魚群をなして大敵に打ち向い　舟　遊
入道雲氷の旗に風がなし　祐　次
入道雲映してうきも動かない　静　馬
一本釣り入道雲を押しあげる　千　尋
入道雲むくむく蟹は泡を吹き　曙　蝶
鉄骨に風少しあり入道雲　三　司
水中花水に生命のある如く　柳　雪
宿題の出来机の水中花　六竜子
子の趣味で作った瓶の水中花　大丘子
熱のある子に水中花動こかない　正　祐

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇　TEL(六二)三九三五番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街　TEL(六三)〇一四七番
串の店　南区畳屋町三ツ寺センター　TEL(三一)九一八四番

柳樽室

路郎生

路郎師の句碑の前で

本社副主幹中島生々庵氏は弓削川柳社十五周年記念西日本川柳大会（九月八日）へ選者として招かれ、弓削駅広場の路郎師の句碑「俺に似よ俺に似るなと子を思い」の前で記念撮影をされた。大会は盛会だつたと。

★句の秋だ。大きく呼吸しよう。前号をはじめて手にした読者が、その充実感に圧倒されたものでありますとの讃辞をもらった。割引して聞いても編集局にとってはうれしい便りだった。

★いつもいうことだが本誌は皆さんのために出しているのであるからいろいろとご意見やらご注文を聞かせていただきたい。出来ることから実現を図りたい。

★本誌の寄稿家では冨士野鞍馬氏の古川柳研究は磐石の重きをなすものであり、岡田甫・丸十府氏等の輪講の熱意は圧倒的であり、東野大八氏の随筆は他誌に見ることの出来ぬ軽妙洒脱の雄筆である。拙稿「窓口談義」では新聞其他について触れて見た。ご愛読が願いたい。

★府、府教委・大阪市、同教委がことしから共同で大阪文化祭を催すことになった。従って大阪市民文化祭川柳大会は十五回から大阪文化祭の川柳大会と改称され府市一本で催すこととなり、これに関西短詩文学連盟が加わることは従来と変らない。何れにしても川柳に生きる人々、川柳に興味を持たれる方々はこの祭典に参加していただきたい。

★関西短詩文学作品展が大阪文化祭の尖端をきって九月三十日から十月五日まで毎日ギャラリーで展観をすることとなった。

★浜田久米雄氏の句集「凡人」が近く刊行される。従来の個人句集と少し発表方法が違っているので親しみ深く読んでいただけると思う。前景気はいい方だ。ドシドシ申込まれたい。（別欄広告参照）

★大阪と一葦帯水の堺市及びそれ以南の郵便物が一週間から遅れ皆さんに大変ご迷惑をけかましたが局数の不足、職員の手不足について目下東京へ陳情に出かけているとのこと。

★大阪市名誉市民の白川さんと楯彦さんのお二人とも亡くなられた。僅に何ンカ月の名誉市民であった。お年がお年だと云えばそれまでだが、まことにあっけないことである。白川さんは大分弱っていられたが、楯彦さんは立派な体格でまだまだ大丈夫だと思っていたのに、寿命なんて判らないものだと思った。ああ。

□■□■

社の黒板

★川雑高知支部は八月二十日限り廃止、同時に大西迷窓氏の支部長を解く。

★川雑土佐支部員と前川雑支部員の一部とをもって新たに支部新設、支部名は川雑土佐支部とし、高知市永国寺町十八番地に置く。支部長は川竹松風氏担任することとなった。

★浅川八郎氏（不朽洞会員）が九月から編集部員となった。

☆川柳支部句会——十月

☆**玉造句会**・10日（木）六時半、題、折込み（広告）・旅行・夢、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、☆**かがみ句会**・2日（水）七時、題、BG・祈る・早口・名物・内心、所、池田古心居、☆**富柳句会**・12日（土）七時、題、祭り、横顔、ライバル、所、富田林市立公民館、☆**明和研究句会**・13日（日）一時、題、眼・電気・秋祭り、所、阪神電鉄鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館、☆**南海電鉄句会**・17日（木）六時、題・駐車・展望・プレゼント、所、難波高架下親和クラブ、☆**京都句会**・16日（水）夕、題、時雨・香水・捨身・名案、所、四条縄手仲源寺、☆**阿倍野句会**・20日（日）七時、題、すき腹・早耳・桁外れ・すかたん、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大萬。

あなたの句帖が出来ました

★**路郎好みだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。**

一冊八〇円（廿送円費）

一人一冊素晴らしい句を

橘高薫風子著　麻生路郎序

川柳句集

価250円
送費60円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川雑編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

発行所　大阪市住吉区万代西五丁目二五
川柳雑誌社
電話大阪（671）6081
振替口座大阪七五〇五〇

高単位綜合消化酵素剤

ビフテノン

30錠・100錠・1000錠

大阪・道修町
森下製薬

会長・麻生葭乃女史

川雑 婦人友の会会員を募る

川柳雑誌社内 川雑婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区二ツ井戸町23

山川阿茶

麻生路郎著

川柳鑑賞

好評噴々

川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪 七五〇五〇

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味わい方—

価二五〇円
送費七〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

募集

課題吟募集

ウインク（千句以内）土井文蝶選
新鮮（千句以内）長野井蛙選
和服（千句以内）高橋操子選（十月十五日締切）
蓉（千句以内）正本水客選
あい（千句以内）邦谷光郎選
温（千句以内）早川清生選
胸（千句以内）
室（十一月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一般作家の雅吟を募る。

▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 三十八年 第十号

定価 一二〇円（送料六円）

（禁転載）

半カ年 七五六円（〒共）
一カ年一、四四〇円（〒共）

昭和三十八年九月廿五日 印刷
昭和三十八年十月一日 発行

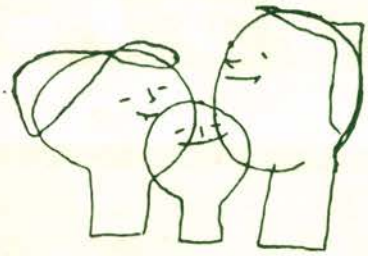
編輯兼発行人 麻生幸一郎
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪 七五〇五〇

Printed in Japan

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和卅八年十月一日　発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人　麻生幸二郎
発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番
定価百二十円（送料六円）

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬莱

大阪なんば・TEL（641）551－2

プラス
＋保温式

サンヨー
ホットママ

EC－22型
現金正価 43,00円

SANYO
三洋電機株式会社

あやめ池
大菊人形

戦国武将繪巻

50万平方メートルの大遊園地いっぱいに　今年もぐっとおもしろく菊の花でくりひろげる"戦国武将絵巻"　はなやかな日本歌劇団秋のおどり"世界の太鼓"をそえて一層豪華です
おそろいでどうぞ……

大阪上本町から奈良ゆき急行30分　日、祝は特急で23分片道90円
京都から西大寺駅のりかえ3分片道125円

近鉄
あやめ池
遊園地

スタミナがつく！

無臭・持続性の新型活性ビタミン

ビオタミン

疲れ・肩こり・足腰の痛み・神経痛
リウマチ・便秘・疲れ目などに…

●神経痛には大量療法！
普通は、大人一日5mg～10mg●神経痛には50mg～150mgが効果的です。
5mg錠・25mg錠・50mg錠　各種包装

SANKYO
三共
三共株式会社

イー47